

年 報 15

平成10年度

1999. 3

山梨県埋蔵文化財センター

年 報 15

平成10年度

1999. 3

山梨県埋蔵文化財センター

序

わが国の経済状況は近年停滞気味ではありますが、開発に伴う発掘調査は減少することがなく、ますます、増加傾向にあります。

当センターでは、文化財保護法の理念に基づいて埋蔵文化財を保護・活用し、さらに先祖から伝えられた貴重な歴史資料を理解し、子孫に伝えていくことが重要な使命と考えております。本年度は、長年の要望でありました「堀文やまなし」という広報誌を刊行することができ、当センターの仕事ぶりや、山梨の土の中からもたらされる最新で重要な考古学情報をタイムリーに、お届けすることができるようになりました。これからは、從来実施されてきた「遺跡調査発表会」や「山梨の遺跡展」などと共に、最新のニュースを提供できるものと考えております。

本書は、1998年度に当センターが実施しました発掘調査及び試掘調査の概要と、遺跡調査発表会等の事業内容を報告するものです。今年度は、22遺跡の発掘調査と12の事業にかかる試掘調査を行いました。この中で、県指定史跡である甲府城跡からは全国的にも出土例が少ない「慶長一分金」が発見されましたが、これは、江戸初期における貨幣流通や甲州金との経済的関係を考える上で大変興味深いものです。長坂町の米山遺跡からは、本県では最古級となる約3万年前の局部磨製石斧が出土して話題となりました。大月市の塩瀬下原遺跡からは、縄文時代後期の長径12メートルに達する大規模な敷石住居跡が発見され、敷石が十字に配されている特殊性から、祭祀的な意味合いが強いものと考えられます。春日居町の平林2号墳は、六世紀中頃に築造されたもので、盗掘を受けていたものの県内では最多の150個を超える玉類が発見されるなど、被葬者の優位性を考える上で興味深いものです。秋山村の金山金山遺跡では、戦国時代の金採掘に関わる露天掘り跡や「金スリ臼」と考えられるものが発見され、金山史研究上で貴重な資料と思われます。甲西バイパスの建設予定地である増穂町の町屋口・藤出池遺跡では、江戸時代の水田跡が発見され、県内初出土となった獸の侵入を防ぐ「乱杭」のほか、繰り返し襲ってきた水害の跡などが確認され、歴史や自然災害との苦労を現代に伝えるものであります。

当センターが設立され、今年度で17年が経過し、刊行しました調査報告書も160冊以上となりました。これらの内容は、旧石器時代から近・現代に至るまで幅広く、本県のあゆみを知る上で欠かせないものと考えております。先祖の残した文化遺産を可能な限り未来に伝えていくことが私たちの責務と確信しております。これらのためにも、本書を有効に活用していただき、埋蔵文化財の保存と保護をはじめ、啓蒙普及活動に一層のご協力とご理解をお願いいたします。

1999年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚 初重

目 次

I	1998年度の事業概要	
1	発掘調査	1
2	整理調査	1
3	収蔵資料の貸出及び掲載許可	2
4	調査研究課課内研究グループ・各種委員会	10
5	第10回市町村埋蔵文化財専門職員研修会	11
6	山梨の遺跡展'98	11
7	遺跡調査発表会	12
8	海外技術研修受け入れ事業	12
9	調査研究課課内研修	13
10	寄贈・購入図書	13
II	各遺跡の発掘調査概要	
1	米山遺跡	14
2	横森赤台遺跡	16
3	石橋北屋敷遺跡	17
4	巣番下堤跡	18
5	町屋口遺跡	19
6	藤田池遺跡	20
7	原間経塚遺跡	21
8	富士見一丁目遺跡	22
9	甲府城（県指定史跡）	24
10	上の平遺跡	25
11	諏訪尻遺跡	26
12	桂野遺跡	27
13	西馬鞭遺跡	28
14	下西畑遺跡	29
15	大木戸遺跡	30
16	西畠遺跡	31
17	平林2号墳	32
18	塩瀬下原遺跡	34
19	長峰砦遺跡	36
20	安楽寺東遺跡	37
21	西の上C（原平）遺跡	38
22	金山金山遺跡	39
23	八ヶ岳東南麓遺跡群ほか分布調査	40
III	県内の概況	
	山梨県埋蔵文化財発掘調査件数の推移（グラフ）・1998年度発掘調査・覧表	46



1998年度 発掘調査位置図

- 本書は、1998年度の山梨県埋蔵文化財センターの事業をまとめたものである。
- 本書の編集は野代幸和、米山真が行った。
- 今年度の発掘調査一覧表及び資料の記載は、3月末日現在で集計したものである。
- 第Ⅱ章各遺跡の発掘調査概要における発掘調査面積の（　）内は、調査対象面積である。
- 左記の地図は、1998年度発掘調査遺跡の位置図である。なお地図中の番号は、右のページの【1. 発掘調査】の表に対応している。

職 員 組 織

所長	大塚 初重
次長	藤田 修
総務課課長	藤田 修
埋蔵文化財指導幹事	田代 孝
調査研究第1課課長	末木 健
調査研究第2課課長	坂本 美夫

総務担当	総務課	
	副主査	一瀬好史
	主事	山形博子
	主事	中村紀子
	主任文書事務員	佐藤由香
	業務員	久保川一三

調査研究第1課		調査研究第2課		
調査第一担当	主任・文化財主事	山本 茂樹	主査・文化財主事	米田 明訓
	主任・文化財主事	吉岡 弘樹	主査・文化財主事	保坂 一英
	主任・文化財主事	深沢 容子	主任・文化財主事	三田村 美彦
	文化財主事	野代 幸和	主任・文化財主事	清水 裕司
	文化財主事	長田 雅巳	主任・文化財主事	伊藤 伸一
調査第二担当	文化財主事	八巻 輿志夫	文化財主事	笠原 みゆき
	主任・文化財主事	熊谷 栄二	主査・文化財主事	長沢 宏昌
	文化財主事	宮里 学	主任・文化財主事	小林 公治
	文化財主事	市川 恵子	主任・文化財主事	古屋 勝之
	非常勤嘱託	大木 丈夫	主任・文化財主事	保坂 和博
調査第三担当	文化財主事	出月 洋文	文化財主事	崎田 哲
	副主査・文化財主事	湯川 修一	主査・文化財主事	田口 明子
	主任・文化財主事	村石 真澄	主査・文化財主事	保坂 康夫
	文化財主事	小林 健二	主査・文化財主事	小林 広和
	文化財主事	田中 宗博	文化財主事	小林 孝子
	文化財主事	依田 幸浩	文化財主事	米山 真
		非常勤嘱託	網倉 邦生	

I 1998年度の事業概要

1. 発掘調査

今年度は22遺跡の発掘調査と、12事業に関わる試掘調査を行った。調査の原団は道路建設15、建物建設2、公園建設2、分譲地造成1、河川開発1、学術調査1となる。調査は4月上旬から3月下旬まで行われ、主として12月以降を整理期間とした。各遺跡の概要は第II章で述べることとする。

番号	遺跡名他	番号	遺跡名他
1	米山遺跡	19	長峰若遺跡
2	横森赤台遺跡	20	安楽寺東遺跡
3	石橋北里奈遺跡	21	西の上C(原平)遺跡
4	菅番下堤跡	22	金山金山遺跡
5	町屋口遺跡	23	八ヶ岳東南麓ほか遺跡分布調査
6	藤田池遺跡	-1	長坂春喜等大泉駐在所増築に伴う試掘調査
7	原間鮮塚遺跡	-2	笠置川流域下水道建設に伴う試掘調査
8	富士見一丁目遺跡	-3	県道17号線改築工事に伴う試掘調査
9	甲府城(県指定史跡)	-4	富士川沿岸等水防対策に伴う試掘調査
10	上の半遺跡	-5	甲府駅北LRT市場建て替えに伴う試掘調査
11	諏訪尻遺跡	-6	リニア実験線変電所建設に伴う試掘調査
12	桂野遺跡	-7	国道137号改築(上北駒バイパス)に伴う試掘調査
13	西馬緑遺跡	-8	県職員宿舎移設改築に伴う試掘調査
14	下西畠遺跡	-9	国道441号改築(現山東バイパス)に伴う試掘調査
15	人木戸遺跡	-10	西関東連絡道路建設に伴う試掘調査
16	西畠遺跡	-11	西関東道路建設に伴う試掘調査
17	半林2号墳	-12	中部横断道路建設に伴う試掘調査
18	塙瀬下原遺跡		

2. 整理調査

整理調査は、主に本年度調査した遺跡の基礎的整理調査と、基礎的な整理がすんだ遺跡の本格的整理調査とを、次のとおり行った。

(1) 基礎的整理調査

番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	米山遺跡	10	西馬緑遺跡
2	横森赤台遺跡ほか	11	平林2号墳
3	石橋北里奈遺跡	12	下西畠遺跡ほか
4	菅番下堤遺跡	13	塙瀬下原遺跡
5	町屋口遺跡	14	長峰若遺跡
6	藤田池遺跡	15	安楽寺東遺跡
7	富士見一丁目遺跡	16	西の上C(原平)遺跡
8	上の半遺跡	17	金山金山遺跡
9	桂野遺跡		

(2) 本格的整理調査

番号	遺跡名	遺跡名	発掘年度
1	海道前遺跡ほか	一般国道141号(芦輪バイパス)建設	1995~1997
2	甲府城跡	舞鶴公園設備	1996~1998
3	十五所遺跡	中部横断自動車道建設	1994~1996
4	村前東遺跡	中部横断自動車道建設	1994~1996
5	宮沢中村遺跡	中部横断自動車道建設	1996
6	木曾山B遺跡	木曾山ニュータウン造成	1991~1994
7	塙瀬下原遺跡	桂川流域下水道終末処理場建設	1995~1998
8	人月遺跡	一般国道20号(人月バイパス)建設	1997

3. 収藏資料の貸出及び掲載許可

貸出許可平成10年度一覧

番号	貸出期間	申請物件名	申請者	利用料
1	4.8~6.8	安瀬守遺跡出土水槽把手付土器1点 ...の仄内遺跡出土陶文土器4点 金山遺跡出土石棺2点	大阪府立歴史文化博物館	春季特別展「縄文の折り・歴史の心」に展示のため
2	6.7~6.13	大塙遺跡出土土器8点	竜王町立竜王小学校	授業の教材として使用
3	6.24~8.30	富士吉田市立歴史民俗博物館に向じ 花鳥山遺跡出土1種文土器3点	静岡県立がん博物館	企画展「(縄文文)の十字路・新馬」に展示
4	6.25~9.11	上野原遺跡出土水槽把手付土器1点	群馬県立がん博物館	企画展「(縄文文)の十字路・新馬」に展示
5	8.21~10.31	北九州山立考古博物館 安佐古窯跡出土土器把手付土器1点	内と外の縄文土器展	内と外の縄文土器展
6	9.1~12.27	塙山市歴史公園出土1種文土器1点 安佐古窯跡出土有孔把手付土器1点	文化庁	海外展「縄文展」フランス共催(パリ市日本文化会館)に展示のため
7	9.2~10.30	磯引遺跡出土鍍金鏡16点 かわらけ2点	富士吉田市歴史民俗博物館	企画展「(縄文文)の十字路」に展示
		伊保木遺跡出土陶器25点 キセル3点 火打ち盒7点 剛造器9点 食器類12点 石衝突化粧新出土古鏡14点 鉢30点 米櫃(ガラス)2点 酒杯(磁器)2点 小皿(陶器)1点		

石巒北居敷出土十師賀十郎（三）5点

- * 土断面土器3点土
- * 杜抜高台环1点
- * かわらけ1点
- 甲フ原遺跡出土石棒2点
- * 深井十郎（深井）2点
- * 漆绘彩十郎10点
- * 開瓦器1点
- * ミニチュア土器2点
- * 凹状石器1点
- * くぼみ石2点
- * 打製石斧3点
- * 磨製石斧3点
- 地盤下層遺跡出土石棒1点
- * 滲沫十郎2点
- * 石棒（白刷）5点
- * 石錐7点
- * 石錐35点
- * 上源円盤8点
- * 上側1点
- * 土製耳飾り3点
- * 石皿10点
- * 磨石2点
- 神野遺跡出土漆绘彩土器4点
- * 土製品17点
- * 石錐2点
- * 石錐1点
- * 張器1点
- * 土器片（北跡）4点

西人浜遺跡出土卷形土器(灰生) 1点	土器片(圆孔) 9点
大林上遺跡出土灰陶碗 1点	土器片(中孔) 15点
中型器外 1点	注口土器片 1点
黑色十點 1点	土器把手 1点
中型器外 1点	土偶 8点
二重L脚壺 3点	土偶 8点
小型S 1点	土偶 8点
S字状口盤台付壺 3点	土偶 8点
小型丸底杯 3点	土偶 8点
高环脚器 1点	土偶 8点
高环坏器 2点	土偶 8点
碗 2点	土偶 8点
瓶 1点	土偶 8点
圓形灰陶器出土 S字状口盤台付壺	土偶 8点
台付壺 2点	土偶 8点
甕 2点	土偶 8点
壺 1点	土偶 8点
壺 2点	土偶 8点
甲府城跡出土瓦	平瓦 5点
"	海板瓦 1点
"	円形大型瓦 3点
"	越瓦 1点
"	かわらけ 3点

8	9.24～12.7	安道寺遺跡出土埴輪把手2点 宿原遺跡出土埴輪把手1点	新潟空港博物館	特別展「縄文人の顔」に展示
9	10.15～12.15	馬占原遺跡出土神獸鏡（複製）1点	埼玉県立さきまた資料館	特別展「鎌ヶ谷古墳とガタケル」に展示
10	11.28～12.27	東郎原遺跡出土埴輪文字土器1点	新潟県史記念館歴史展示会 上野原町郷土資料室	古代歴史記念実物館に展示のレプリカ製作のため
11	11.30～3.31	南大浜遺跡出土水口土器1点 聯合坂遺跡出土埴輪文字土器14点 長峰古墳群出土埴輪把手2点	全国展「上野原の遺跡」に展示	
12	1.11～6.30	のれ道新出土埴輪文字土器6点 ・ 洋形形土器1点 ・ 有孔脚付土器1点 ・ 小形土器2点 ・ 豊1点 ・ 土器片陶瓦1点 ・ 上鉢3点 ・ 耳飾り2点 ・ 土器円盤37点 ・ 剥製石斧4点 ・ 打製石斧16点 ・ 石焼16点 ・ 石焼4点 ・ 石器1点 ・ 石器1点 ・ 始石・城石・凹石5点 ・ 洋子1点 ・ 石棒1点	文化庁 重要文化財指定調査のため	
13	3.1～12.29	安道寺遺跡出土水口土器把手土器1点 ・ 有孔脚付土器1点	東京国立博物館	博物館所蔵の考古資料相互利用実績事業による

掲載許可平成10年度一覧

申 請 者		申請日	利 用 目 的	申 請 物 件 名
1	4月2日	川岸口・新阪井出張所	「山梨県史」資料欄「原始・古代・李占(遺跡)」に囲むるボルスター及びパンフレットに掲載のため	龜岡家子御出土 鎧鏡
2	4月7日	明野村教育委員会	明野村復興文化財センター常設展示のため	重宝形十番 金の尾羽26号住戸
3	4月13日	南都田町教育委員会	「南都田町説」に掲載のため	イネのアシントナーベル 中道町の古木製品 金剛石と石臼丁 中道町の古形陶器 長田口遺跡 中道町山芦原群 桃了坂古墳石室 三浦町の古墳十数個 施部遺跡 S字形陶器 加宇那保古墳の横穴式石室 中村市東山山麓の竹村遺 能登遺跡・古墳時代住居跡 西田遺跡の土器 能登遺跡の火打器 県内出土品 能登・二ノ子之瀬跡出土 天狗山古墳 山梨県児玉川より発見されたナツマン象の臼齒 南相馬町の公園2遺跡のナイフ形石器
4	4月25日	株式会社 山梨新報社	「山梨の文化財・博物館」カラーリポート他に掲載のため	ガイドブック「山梨の文化財・博物館」カラーリポート 龜山閣出版「秦の考古学」は陰文奥揭載のため
5	4月28日	市毛 純		廻所遺跡出土 石井 余体写真 廻所遺跡出土 石井 水俣交付状況

6	5月 8日	川柳口断跡山遺跡	山梨県企楽会「山梨県企業所40周年記念会」に掲載のため	丘の公園遺跡 漢字風景
7	5月12日	株式会社 新人作家会社	日本古代史「都市と神祇の聖地」(仮題)に掲載のため	金生遺跡 石棒祭遺跡等
8	5月20日	東京 明治	写真展「The Heart of Japan」に出展のため	金小遣跡 中寺土偶 (レプリカ)
9	5月22日	北九州市立考古博物館	「西と東の繋がり」器・土器が語る歴史時代の日本展ー「坂越」に掲載のため	上野原遺跡出土 鍋文土器
10	5月25日	日本地質調査会	「全国地物解説会 C.D-ROM版 全国版」に掲載のため	安通寺遺跡 出土 織文土器
11	6月 1日	新潟県立歴史博物館	第60回企画展「宮文化の十文字 -群馬・土器文様の文化-」に掲示、並びに回路・広報物に掲載のため	白山山頂遺跡 出土 織文土器 3点
12	6月 9日	新潟自然保護園	「やまなしの歴史文化公園」に掲載のため	考古博物館外観
13	7月 4日	株式会社 小学館	「古代史の論点」(略)を「相模のため」	金生遺跡 中寺土偶
14	7月16日	中世都市研究会	中世都市研究第5号「都市をつくる」に掲載のため	安通寺遺跡 行孔磨削土器
15	7月16日	株式会社 東京堂出版	「考古学を知る事典」に掲載のため	中寺遺跡 鍛冶跡
16	7月22日	株式会社 幸久社	太陽コレクション「続・下野道周遊散歩」9 関東編に掲載のため	甲府遺跡 天守台 石垣
17	8月 6日	山梨県地形教育研究会	「美術資料」山梨県版に掲載のため	・甲府遺跡C遺跡出土 磁器把手付土器
18	8月 6日	酒井 広子	インターネットホームページ「織文ネットワーク」内 「織文ナチちゃん」に掲載のため	鶯谷遺跡出土 織文土器
19	8月26日	株式会社 沢島出版房	高校生対象社会科教科書「新編日本史図説」に掲載のため	考古博物館内 壁穴住居復元模型
20	8月27日	ワシントンホテル株式会社	社内報に掲載のため	甲ヶ原遺跡出土 石皿と磨石
21	9月 3日	株式会社 航進社	東北電力株式会社発行「織文の小」(仮題)に掲載のため	金治丸瓦
22	9月10日	株式会社 インタレスト	株式会社ベネッセコーポレーション発行「遠とぎ縄文」(仮題)に掲載のため	後元100年記念出土 磁器把手付土器
23	10月 1日	株式会社ランダムコミュニケーションズ	「全国・古代遺跡の旅 (仮称)」に掲載のため	安通寺遺跡出土 水運肥把手付土器
24	10月13日	アーバス	ダイワロリヤルホテルズ「グラントスティージ'98」に掲載のため	大原遺跡出土 大型把手付土器
25	10月16日	山梨県史跡さんぽ	「山梨県史 資料編2」に掲載のため	のせ遺跡出土 有孔網把手土器
26	10月26日	上野原市教育委員会	トヨタ町郷土資料展示室企画展「上野原の遺跡」(原体)に展示 リーフレットに掲載のため	金生遺跡 金平糞
				鶯谷遺跡出土 有孔網把手土器
				丸山古墳 金平糞
				緑谷遺跡出土 磁器把手付土器 石棒
				中寺遺跡記念館 岩空寺跡
				鶯谷遺跡出土 有孔網把手土器
				金生遺跡 金平糞
				春羽塚古墳 マコガホ
				緑谷遺跡出土 ウマの首
				花島山遺跡出土 エゴマ
				南入浜遺跡 遺物出土状況

			南人紙遺跡 地金状況写真 2点 混合板遺跡 遺物出土状況
27	10月30日	株式会社 小学校	「毎文再びシリーズ 楠文時代の文流と文局」に掲載のため
28	10月30日	株式会社 あかね書房	「テーマで調べる博物館・史跡」第1巻・第2巻に掲載のため
			金牛遺跡 第2号祀石
			廻上記の丘 航空写真 銅子保古墳と丸塚古墳 墓心写真 銅子保古墳出土 球形埴輪 考竹博物館展示室内 復元仕回 一つ丸塚山土 士岡 甲ツ原遺跡出土 斧面把件付十幅
29	10月30日	山梨県史さん室	「山梨県史 資料編2」のおりに掲載のため
30	11月27日	株式会社 山川出版社	「山梨県の歴史」に掲載のため
			金生遺跡出土 中世土器 北部遺跡出土 ワマの角 甲斐鉄子原古墳
31	11月30日	ネオスペースズ	県別府西「金ウイングデイスプレイ」に使用するため
32	12月 1日	甲斐町史館さん室	「甲斐町史 史料編第1巻」 「考古・古代・中世」に掲載のため
			前山寺跡火葬骨灰坑 旗川遺跡出土 五輪塔 旗の山より出土 清野B区の瓦 旗川遺跡田区全骨 海老地遺跡1号住居全骨 小倉堀遺跡の遺物出土遺物
33	12月 4日	ハイビクシングミュージックアソシエーション	「日本人の音世界」～流れにみる暮らしと文化～に掲載のため
34	12月 7日	山梨県史館さん室	「山梨県史 資料編2」に掲載のため
			の尻遺跡出土 上印 2点 左の公館遺跡山土 石器群 立石遺跡出土 石器群 麻林遺跡出土 銅鉢形土器 一の尻遺跡4号住居出土 織文土器 天神遺跡出土 ヒスイ大球

			海道前C遺跡出土 鹿面形手付土器・石棒
			天神遺跡出土 彩文十器 中フ原遺跡出土 彩文土器 新谷鬼塚遺跡出土 彩文土器 身延河源遺跡出土 木製農具 金の屋敷遺跡出土 土器 手 彌生器一括写真 土陶器 手写真 猿部遺跡出土 人形 甲斐郡土器一括写真
			中府後元傳燈 中府後元傳燈 考古博物館内 鶴穴住居復元模型 上野原遺跡出土 水運把手手器 の浜遺跡出土 上帆 身延河源遺跡出土 木製農具 かんかん塗古墳出土 磐貝 考古博物館 外縁 平安時代上置セツト写真 ミユージアムヨリフブグズ 香や影チュータ 寺河遺跡出土 樹木年号写真 谷羽遺跡出土 クマ下傷骨出土状況 鶴形河原後発掘調査風景 東御遺跡出土 深糸形土器 花鳥山遺跡出土 深糸形土器
35	12月 8日	出町山莊前	「まちづくり委員会」開会式報告書に掲載のため
36	12月10日	テレビ山梨会開局	「フレッシュマッチア'99」に掲載のため
37	12月15日	山梨県教育委員会	「公立博物館基本構造指針書」に掲載のため
38	12月16日	朝日新聞出版部山梨編集部	「豪新編文学」(収録)に掲載のため
39	1月 8日	東八西湖磨工 有限公司 ケーニス・ブランシング	東八西湖磨工会社跡地区划計画のホームページに掲載のため ㈱ベネッソセコーポレーシンフண行「小ハチャレンジ」4月号に掲載のため
40	1月14日	朝日新聞社山梨編集部	「最新編文学(収録)」に掲載のため
41	1月20日	株式会社 小学館	「日本歴史事典(収録)」に掲載のため
42	1月21日	西東社	西東社「写真と同時にわかる日本の古墳・古代遺跡」に掲載のため
43	1月29日	有限公司 キヤロフト企画	
44	2月17日	山梨県史欄さん重	「山梨県史」資料欄2(開始・六代)に掲載のため
45	2月22日	株式会社 山梨社	講談社学術文庫「紀一日本古史」に掲載のため

4. 調査研究課課内研究グループ・各種委員会

本年度は下記の6研究グループと2委員会で活動を行った。

縄文部会 縄文部会では、昨年度に引き続き県内出土の縄文土器の集成を行った。この作業は草創期から晩期までの“縄文土器縦引き”を作成することを目的としており、縄文土器を時期分類しつつ集成を試みたものである。掲載する土器の基準としては、できる限り完形品を収載することとしているが、草創期などは破片資料を載せることにする。各時期の集成は終了しており、掲載する土器のリストアップを前期の途中まで行った。

古墳部会 等部会では昨年度に引き続き、県内の古墳に関するデータカードの作成を行った。今年度は中巨摩郡から北巨摩郡に分布する後期古墳（竜王町西山1号墳・双葉町舞台古墳・明野村三之藏古墳群等）を実際に訪れ、立地や環境の確認、石室の現存状況等のデータ収集を行った。今年度はデータ収集が思うように進まず、カード化が滞る傾向にあったが、今後さらなる蓄積を目指したい。

中・近世部会 当部会では、平成8年度から「山梨における中世土器の考古学的編年の確立」を研究テーマとして、作業を行っている。昨年度に引き続き、県内の地域差が著しいことから、6地域に分けて資料を収集し、編年一覧の骨組みを構えることを目的としてきた。現在、14～15世紀の資料の検討が課題となっている。

実験考古学研究部会 本会は、遺構・遺物等の解釈について、「実際に製作するなどの方法によって解明すること」を目的に活動している。今年度の研究課題は、「古代製鉄技術の復元」を行った。昨年度、自作の製鉄炉により鉄を製作したので、今年度は、鉄から銀治作業を経て、製品製造を目指したが、気象条件等の事情により、準備段階で終了した。

考古教材研究部会 当部会は、センターに文化財主事として赴任してきた中学校・高等学校の教員10名と専門の文化財主事1名計11名で構成されている。本年度についても昨年までと同様、遺物などの考古資料をどのようにして教材化し、実際の授業など教育実践の場で有効に活用していくかという点について研究した。また、これまで発行されている『先生のための考古資料集』についても今後取り上げるべき内容、課題などについて検討した。

埋蔵文化財関係法令研究部会 文化財保護法について考えることを主な目的としてグループを結成した。まずは、文化財保護法の運用の実態を知るべく事例研究から始めた。府中裁判（府中市埋蔵文化財発掘費用負担事件）を取り上げ、原因者負担の原則について検討を加えた。ある程度の経済的負担をするとしても、それが法の趣旨を逸脱した不適に過大なものでない以上、発掘者（原因者）が受忍すべきであるとされた。しかしこの前提として埋蔵文化財包蔵地の周知化が不可欠であり、次々に発見される遺跡の追加や近年の情報公開の流れを考えて、新しい公開方法を検討すべきであることが確認された。来年度も継続して検討を進める予定である。

出土品の学校教育における活用委員会 文化庁は、平成9年より出土品の学校教育における活用を強く要望している。そこで、本センターにおいても今年度より所蔵する出土品の学校教育における活用への取り組みを始めた。今年度の具体的な活動は、活用可能性の検討・活用に付随する問題点の洗い出し・小中高の教科書分析・全国での実践例調査・貸出可能資料のパッケージ化などであった。また、上野原町立巣中学校からの要望で、出土品を使っての授業を6月に行った。

出土品の取り扱い基準の検討委員会 平成9年2月の文化庁の報告により、出土品について、明確な方向性が打ち出されることになった。要約すれば、出土品をはっきりランキングすることによって保存の必要性があるものとそうでないものを区分けし、保存活用を図れと言うものである。これを受けた当センター内にも検討委員会を設け、学術文化財課を交えて討議してきた。このことは発掘調査段階にも運動し、収蔵場所への出土品の持ち込みの軽減の方法、ひいては調査方法にも係わることとなり、センターと学術文化財課の意見を集約して県として方向性を打ち出す必要に迫られていた。今年度はこの検討を数回重ね、このたび集約作業を終了した。

5. 第10回市町村埋蔵文化財専門職員研修会

山梨県内の市町村教育委員会等において埋蔵文化財行政に従事する専門職員の知識習得と技術向上を目的とした「第10回市町村埋蔵文化財専門職員研修会」は、例年のように当埋蔵文化財センターが主催して平成11年2月19日に開催された。

今回の研修会は、講師に奈良文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部保存工学研究室長の加藤允彦先生をお迎えし、研修のテーマの『遺跡保存整備の現状とその問題点』について、山梨県立考古博物館「風土記の丘研修センター」講堂を会場に半日の日程で実施した。

平成元年より始められた「史跡等活用特別事業」によって、本格的に建造物等の復元・遺構の保護露出展示施設の建設が行われるようになった。また、自治省による地域文化財保全事業も始まり、国指定か破壊消滅という二者択一的な文化財（遺跡）保存ではなく、地方自治体においても文化財（遺跡）を保護整備する財源が確保されるようになった。一方、平成4年には「世界遺産条約」を批准し、ユネスコにテンタティブリストを提出、法隆寺や古都京都の文化財などが文化遺産として登録された。その結果、本格的に文化財のAuthenticityや復元整備の問題が論議されるようになり、山梨県内においても、勝沼氏館跡等の整備が衆目の中に行われた。このような状況下で文化庁において実際に文化財（遺跡）保存整備と活用の牽引車として活動された加藤先生の講演は、地方自治体で文化財行政に連日従事している専門職員にとってとても意義深く示唆に富んだものであった。

講演は、「文化財の種類・日本における遺跡整備の歴史・記念物の保存修理事業・「史跡等における歴史的建造物等の復元の取り扱いに関する専門委員会」の設置および「基準」の制定・文化財の管理と活用を論点に行われた。特に、文化財の管理と活用については、活用と復元の本義を問題点を明確にしながら説かれ、勝沼氏館跡と青森県の根城跡を整備事例として挙げるとともに、「古都京都の文化財」が世界遺産と指定されるまでの登録への過程とその意義を述べられた。

6. 山梨の遺跡展 '98

例年、当埋蔵文化財センターと市町村教育委員会で実施された発掘調査の成果を、年度末に「山梨の遺跡展」として発表・展示している。年度内に行われた発掘調査の成果の一部を、いち早く県民に紹介するもので、当センター主催で実施した。

本年度の開催は、平成11年3月13日から4月4日まで県立考古博物館の特別展示室を会場に、入場無料で行った。展示の内容は、①個別の遺跡の展示（当埋蔵文化センター展示）、②市町村展示、③パネル展示、④新聞パネル展示の4種類の展示をした。①では、米山〈横針前久保〉（旧石器）・西の上C〈原平〉（水晶・土器類）・桂野（土器類・石器類）・上の平（土器類・石器類）・諏訪尻（土器類・土製品）・塩山バイパス関係の大木戸（土器類・土偶）・平林2号墳（須恵器・玉類）・石橋北屋敷（土師器）・横森赤台（五輪塔）・金山金山（石臼）・甲府城（瓦・五輪塔・慶長一分金）・町屋口（焰烙・銭）の12遺跡の出土資料とパネル展示を行った。②では一宮町の国分寺跡（土器・瓦類）、御坂町の桂野（土器類・石器類・土偶）、若草町の溝呂木道上第5遺跡第Ⅱ地点（墨書き・土器）の各関係の教育委員会から出土遺物をお借りし、展示を行った。③では、富士見1丁目・塩瀬下原・長峰砦・藤田池・安楽寺東・壱番下堤跡の6遺跡を中心に遺構写真や遺跡の全体写真を用いた展示、民間信仰調査がパネルで調査の内容を紹介した。④では、本年度、埋蔵文化財や発掘調査について新聞に掲載された記事をパネルを使い展示した。

これらの展示を通じて埋蔵文化財への理解、また山梨という郷土への歴史認識を深めていただくことができたと考えている。

7. 遺跡調査発表会

当センターでは、県内で実施された発掘調査の内容を県内外の一般の人々に広く知っていただくため、山梨県考古学協会と共に年2回の遺跡調査発表会を実施している。例年のごとくスライド等を用いた口頭発表に加え、出土遺物や写真などの展示を行った。以下に概要を述べる。

1998年度上半期遺跡調査発表会（10月17日（土）　於：風土記の丘研修センター 約120人参加）

1. 米山遺跡A区（仮称） 北巨摩郡長坂町白井沢字横針1558外（当センター：村石真澄）15ページ参照

2. 大柄遺跡群～南大浜遺跡～北都留郡上野原町大柄字南大浜36外（大柄遺跡群発掘調査：宮沢公雄）

縄文時代中期後半から終末にかけての堅穴住居跡21軒（柄錐形敷石住居跡2軒を含む）、古墳時代後期の堅穴住居跡1軒等を確認した。特に20号住居跡からは釣り手土器2点がまとまって出土した。

3. 境沢遺跡 東八代郡御坂町成田字境沢2185-1外（御坂町教育委員会：望月和幸） 弥生時代後期の5軒、掘立柱建物跡2軒等を発見した。また低地であるため柱根や礎み物、柱の下に敷く礎板等木製品が多量に出土した。

4. 住吉遺跡 中巨摩郡甲西町古市場字住吉248-1外（甲西町教育委員会：廣瀬和弘） 弥生時代の堅穴住居跡1軒、古墳時代の堅穴住居跡2軒、中世（16世紀頃）の溝状造構2条が出土した。溝状造構からは完形の天目茶碗が2点出土した。

5. 平林2号墳 東山梨郡春日居町鏡目字平林地内（当センター：吉岡弘樹）33ページ参照

1998年度下半期遺跡調査発表会（3月14日（日）　於：帝京大学文化財研究所 約70人参加）

報告 平成10年度の県内埋蔵文化財の調査と保護（山梨県教育庁学術文化財課：高野玄明）

県内の今年度の発掘調査件数は2月まで556件を数える。そのなかで特に注目された事例の報告及び保存問題や史跡・考古資料の指定等について報告された。

1. 塩瀬下原遺跡 大月市梁川町塩瀬842-2外（当センター：伊藤伸一）35ページ参照

2. 龍角西造跡 北巨摩郡長坂町長坂下条字龍角1391外（長坂町教育委員会：村松佳幸）

古墳時代中期の堅穴住居跡10軒、平安時代の堅穴住居跡7軒、中世の建物跡2軒、ピット約400基等が確認された。このうち古墳時代中期の住居跡は北巨摩地域ではほとんど類例が見られず、貴重な発見となった。

3. 石橋北屋敷遺跡 中巨摩郡八斗田村野牛島字石橋地内（当センター：依田幸浩）18ページ参照

4. 深山田遺跡 北巨摩郡明野村小笠原字深山田（明野村教育委員会：佐野隆）

奈良・平安時代の堅穴住居跡4軒、中世の掘立柱建物跡とみられる柱穴約4,000基、集石墓2基、火葬墓（火葬施設）4基等が確認された。出土遺物は中世の仏具とされる銅鏡14口、13世紀後半以降の中国陶磁、高麗青磁など県内では類例の少ない資料が多く出土した。

5. 勝沼氏館跡 東山梨郡勝沼町勝沼（勝沼町教育委員会：室伏徹）

史跡環境整備基礎調査のため、平成8年度から現地点の調査を開始し、現在までに漆碗、建築部材、人形等多数の木製品及び植物遺存体が出土している。また漆で接着した常滑窯、木材削りかす、砥石断片などが出土し、工房跡の存在も確認した。

上半・下半期の発表会を通して各発表者には、発表の際一般の人々にもわかるように努めていただいた。また上半期においては発表遺跡を県内全般からバランスよく選択し、一人でも多くの人が興味を持てるよう努めた。

8. 海外技術研修員受け入れ事業

山梨県が毎年実施している海外技術研修員受け入れ事業に基づいて、中華人民共和国の四川大学助教授、李永福氏（35才・男）を1998年7月1日から1999年2月19日の約8ヶ月間受け入れた。

研修の内容は、山梨県の発掘調査の方法と実践、および日本考古学の基礎知識を学ぶことを目的としたものである。期間中の成果を当センターの研究紀要に日本語で論文を発表している。また、当センター内で講演（長江流域の考古学）を行っている。

9. 調査研究課課内研修

調査研究課では、職員の知識向上のために2ヶ月に1回程度の割合で課内研修会を開催している。本年度の研修会の内容は下記の通りである。

回	日 時	講演・発表テーマ及び発表者	概 要
1	平成 10 年 4 月 30 日	「改めて法 98 条の 2 について考える」 当センター 出月洋文氏	文化財保護法における「発掘」と「発掘調査」の違いなど条文の確認、また、条文の運用方法について考察をおこなった。
2	平成 10 年 5 月 29 日	「静岡県に導入されている遺物洗浄方法について」 当センター 小林公治氏	スライドを交えながら、洗浄の内容、利点、問題点について紹介をおこなった。
3	平成 10 年 6 月 30 日	「職場研修プログラム公務員倫理について」 当センター 次長 藤田修氏	服務制度の確認をしながら地方公務員としての行動基準のありかたの再確認をおこなった。
4	平成 10 年 9 月 30 日	「平成 9 年度埋蔵文化財発掘技術者研修に参加して」 当センター 宮里学氏	日本における遺跡整備の歴史の概要について概説し、遺跡修景整備、集落遺跡の修景整備、古墳の整備の事例の説明をおこなった。
5	平成 10 年 10 月 30 日	「中国の考古学について」 四川大学歴史系考古学専業助教授 李映福氏	中国古代の青銅器、石刻文字、拓本などを対象にして歴史を研究する学問である金石学の立場から中国の考古学を検証した。
6	平成 11 年 1 月 29 日	「保存処理室の活用と鉄器等金属製品の管理について」 当センター 保坂康夫氏 市川恵子氏	課内アンケートの結果をもとに、保存処理すべき遺物特に金属製品の処理、管理のあり方について検討された。
7	平成 11 年 2 月 25 日	「埋蔵文化財担当職員等講習会に参加して」 当センター 保坂康夫氏	文化財保護法の改正の動きについての具体的な説明がなされた。

10. 寄贈・購入図書

今年度の当機関で登録された図書数は、約3,800冊である。現在43,000冊におよぶ蔵書数があり、来所される方々や職員に幅広く活用されている。寄贈された本は、全国各県・市町村教育委員会から送られてくる発掘調査報告書・年報・研究紀要や、博物館・資料館などの企画展・常設展示図録が主体である。この他、考古学・歴史の概説書や専門書、および民俗関係の書籍も100冊あまり購入した。

II 各遺跡の発掘調査概要

1. 米山遺跡A区（通称：横針前久保）

所在地 山梨県北巨摩郡長坂町白井沢字横針1558外・

長坂町大八田米山6811-35外

事業名 中央自動車道八ヶ岳パーキングエリア改築（上り）

調査期間 1998年4月13日～7月15日

調査面積 1,000m²

担当者 村石真澄・田中宗博



米山遺跡A区 位置図

八ヶ岳火山の山麓扇状地の標高792m付近に米山遺跡A区は位

置する。周辺は開けた地形が広がっているが、これに対し遺跡が直接面する谷は渋曲し小規模であり、110mほど北で谷頭となっている。米山遺跡が立地するこの谷の東側の緩斜面は、その背後に急斜面を背負っている。中世から継続すると考えられる現在の集落が、八ヶ岳おろしを避けるかのように、谷を見下ろす日当たりの良い南向き斜面に立地しているとの好対照をなしている。この谷は現在では水田として利用されているが、以前は大半が沼であったという。今も地下水が豊富で、遺跡北東約120mには「弁天池」と言われる湧水がある。

遺物包含層は、八ヶ岳を起源とする佐久ロームであるが、耕作により包含層の付近まで土壌化しているため遺存状態は良くない。肉眼によるAT層の確認は困難で、ナイフ形石器と局部磨製石斧が出土した付近の土層断面から採取した土壤試料を分析中である。この中間報告によると、ナイフ形石器や局部磨製石斧はAT層よりも下位にあたると考えられる。またAT層の下位からは、青灰色のやや風化した径2～4mmの小岩片が多く確認された。これは「青スコ」と通称される青灰色火山礫であり、八ヶ岳の山体が水蒸気爆発などで吹き飛ばされたものと考えられる。斜面下方の標高794m付近ではとくに濃集し、しかも流水によって堆積していることが確認された。また周辺の露頭観察では、標高約800m以上ではほとんど見られず、上空から降下したのではなく泥流などによって供給されたものと考えられる。この「青スコ」の下位約2mからは、S-1（ややPm-4）と考えられる赤褐色スコリアが確認されている。「青スコ」包含層以下では遺物がほとんど出土しなかったため、掘り下げの目安とした。

石器・黒曜石・使用痕がある石材・搬入された石材など遺物の分布範囲は直径約30mである。これに対して炭化物小粒の直径約20mの分布範囲がやや西にずれて重なっている。石器製作場所を特定できないかと、黒曜石などの微細な剥片に注意を払ったが、ほとんど発見することが出来なかった。この調査区内では石器を製作していない可能性が高い。また、小砾から巨砾（最大11kg）までの砾を取り上げて水洗して観察したが、焼けた痕跡が肉眼ではっきり認められたのは1点のみであった。しかし、120g以上のものは炭化物小粒の分布範囲とほぼ重なり、人為的に持ち込まれたものと判断される。

整理途中の概数では、石器が十数点、微細剥離痕のある剥片が約40点、砾は取り上げ総数が397点で、120g以上のもの33点である。凝灰質頁岩製の局部磨製石斧（挿図）1点とこれと近似した石材の石核1点、刃部のみの小片で局部磨製石斧の刃部の可能性が高いもの1点。この他石器はすべて黒曜石製であり、ナイフ形石器1点（挿図）、台形様石器1点、削器3点、彫器1点である。黒曜石は色々な様相をもち、複数の産地のものが混在している可能性が高い。これらの遺物は旧石器時代に属するものであり、AT層下位のローム土中からの出土であることと、局部磨製石斧・ナイフ形石器の型式学的判断からおよそ3万年前という年代が推定されている。

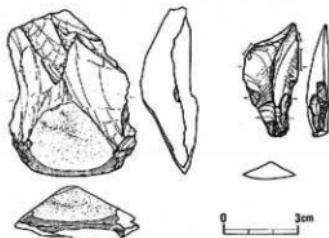
遺跡立地は湧水がある谷底に面した日照条件が良好でない西向きの斜面であり、居住には適地でない。また居住地の中で多く発見されている石器製作の痕跡に乏しい。しかしここには、石器や砾が運び込まれ、焚き火をしたことが明らかである。ぬかるみに足をとられて弱った動物を狩猟するなどして、沼のほとりで解体などを行った可能性が高いと考えられる。



調査風景



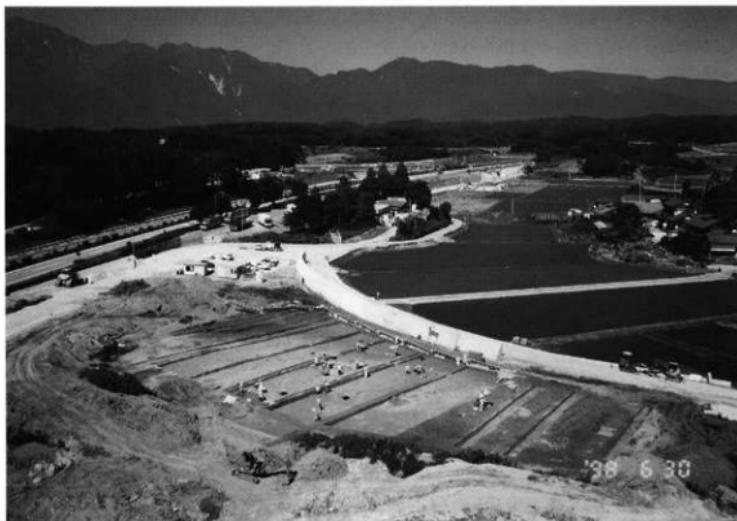
遺物出土状況



局部磨製石斧（左）とナイフ形石器（右）



現地説明会の様子



米山遺跡A区（横針前久保）を東方から眺む

2. 横森赤台遺跡

所在地 北巨摩郡高根町箕輪字赤台700-1外
事業名 国道141号バイパス（箕輪バイパス）建設
調査期間 平成10年5月11日～7月9日
調査面積 1,600m²
担当者 野代幸和・長田雅巳

本遺跡は、八ヶ岳南麓の台地上、標高700m付近に立地する遺跡である。箕輪バイパス関連建設事業に伴う発掘調査としては、今年度で4年目となり、今回の横森赤台遺跡を最後に一連の調査の区切りを迎える。これまでの発掘調査では、約4,500年前のムラの跡や人面装飾付き土器などが発見された海道前C遺跡（縄文時代）、約1,000年前のムラの跡が発見された大林上遺跡（平安時代）や宮の前遺跡（縄文・平安時代・近世）その名の通りの古墳遺跡（近世）、そして今回の横森赤台遺跡では縄文時代から近世にかけての遺構や遺物が発見された。

遺構については、縄文時代の中期の掘立柱建物跡1基、縄文時代から近世の土坑約50基、平安時代以降と考えられる竪穴状遺構や中世以降と考えられる溝1条などのほか、15～16世紀代の火葬施設やその火葬骨を納めた墓、土坑墓が合計15基確認された。遺物としては、銭、漆碗の破片、土師質土器のほか、五輪塔などが約200点出土した。

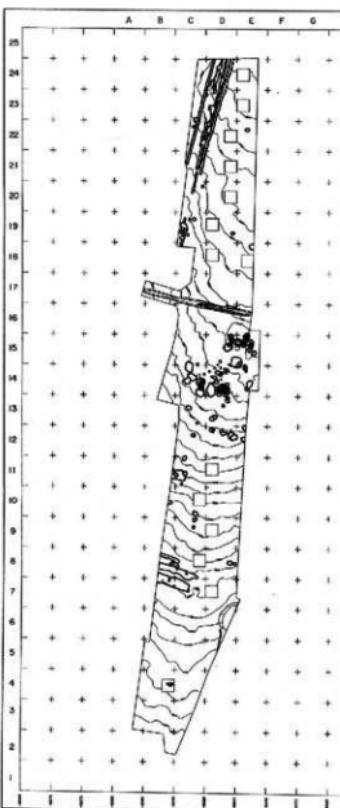
本県では、中世の墓に関する調査例が少なく、その埋葬形態に不明の点が多くあったが、今回の調査で今まで土葬が主体と考えられていた該期の埋葬方法に加え、新たに火葬を行っていた事実も明らかとなり、今後の中世末期の墓制を考えていく上で貴重な発見となった。



中世墓坑群



横森赤台遺跡 位置図



横森赤台遺跡遺構全体図

3. 石橋北屋敷遺跡

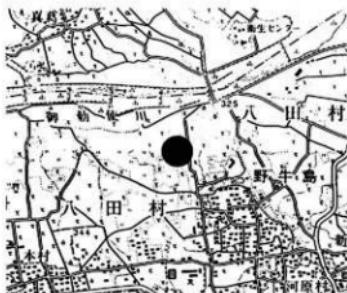
所在 地 中巨摩郡八田村野牛島字石橋地内
事 業 名 一般国道52号改築（甲西バイパス）・中部横断自動車道建設
調査期間 1998年4月20日～12月7日
調査面積 10,000m²
担 当 者 小林健二・依田幸浩

本遺跡は、御勅使川扇状地北端の西から東に向かって傾斜する微高地に立地し、標高は320m前後を測る。現在の御勅使川は、戦国時代以降の治水事業によって新しく開削されたもので、遺跡の北方約200mの地点を流れている。旧御勅使川の位置は遺跡の南方にあたり、明治時代まではその流路が残っていた。本遺跡は新旧の御勅使川に挟まれた地帯に立地しており、平成8年度の試掘調査によって戦国時代の土坑や土器が確認されたことから、治水事業などの水利に深く関わった集落の発見が期待された。

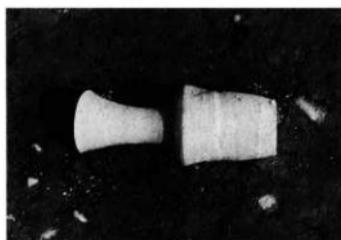
本調査は昨年度から開始され、平安時代の住居跡、戦国時代の区画溝や戸井戸などが発見されている。今年度は既調査区（2a区）の東側（1区）と西側（2b区、3区）の調査を行い、奈良・平安時代の住居跡13軒、鎌倉～室町時代にかけての道路跡、戦国時代の区画溝のほか、掘立柱建物跡6棟、土坑・ピット群（戦国時代の土坑墓を含む）が発見された。

奈良・平安時代の住居は、2a区から3区にかけて分布しており、奈良時代末から平安時代末まで長期的な居住活動が行われていたことが確認された。本遺跡の西方約200mには、古墳時代・奈良・平安時代の集落が発見された大塚遺跡があり、今回発見された住居群もこの大塚遺跡に続くムラの一部だったと考えられる。3区で発見された鎌倉～室町時代に造られたとみられる道路跡は、幅約3mで、両側に幅約1mの側溝を伴っている。道路は調査区内を東西方向に走っており、3区の東側にのびる現在の農道と同一線上にある。さらに東に進むと、古く野牛島の集落の中心地にあたるとされる一帯があることから、当時の村の中心地へと続く主要な道路であったと考えられる。2a区、2b区および3区で発見された戦国時代の区画溝は、幅約1mから2m以上、深さは最深部で1m以上になる。溝は直線的に掘られており、方形の区画を造り出している。区画溝からは、戦国時代の土器や石臼などが出土したが、いずれも溝の上層から出土しているため、道路と同じ時期には、既に区画溝が存在していた可能性もある。3区の溝からは、ウマの下顎骨が2頭分並んで出土している。骨の周辺には溝の中へ石がつめられており、溝を埋める際に何らかの祭祀が行われていたものと考えられる。

今回の調査では、御勅使川扇状地における何世代にもわたった人々の生活の痕跡が確認された。本遺跡は、この地域一帯の集落の変遷を解明する上で貴重な資料を提示している。



石橋北屋敷遺跡 位置図



3区 7号住居跡内出土の「壺G」



3区 鎌倉～室町時代の道路跡

4. 壱番下堤跡

所在 地 中巨摩郡八田村上高砂字壱番下1378外

事 業 名 中部横断道路建設

調査期間 平成10年11月4日～平成11年1月12日

調査面積 3,036m²

担 当 者 保坂康夫・小林広和

本遺跡は釜無川にかかる双田橋の南東約300mの地点に位置し、標高は約310m。水田地域だが釜無川の旧河原であったところで、周囲には古い堤防が残存する。また、竜王町の信玄堤、白根町・蘿崎市の将棋頭などが近くにあり、江戸時代に隆盛した「甲州流治水」の起源を考えるためには絶好な地点である。

本遺跡には地元で、二番堤ないしは三番堤と呼ぶ旧堤防がある。釜無川に構えるかたちで南東方向に向かって延び、現在使われている堤防に連続している。今回の調査では、この旧堤防の川表側（東側）3,000m²と、旧堤防の本体部分36m²の調査を実施した。

その結果、川表側調査区域では旧堤防に沿って高さ1m～1.5m、幅5mの護岸施設が長さ40mにわたって確認された。調査地域東側では、保存状況が良好で、緩やかな全面の斜面と平坦な中段がみられ、表面に直径20cm程度の河原石が敷かれていた。内部は全体が自然層の礫層や砂層であった。なお、西側では明治ころと思われる洪水層に全面が大きく削られていた。

また旧堤防の本体部分では、現在12mの幅であるが調査の結果、川表側に幅6m、高さ2.5mの古い堤防が埋没していることが確認された。上半分は砂が盛られ、下半分は砂層、シルト層などの自然堆積層であることが確認された。構築年代については、出土遺物がなく不明である。木材が出土しているのでその炭素14年代測定や土壤分析、地形分析等で検討していく。



壱番下堤跡 位置図



全 景



護岸施設



護岸施設と旧堤防

5. 町屋口遺跡

所在地 南巨摩郡増穂町青柳1148-1外
事業名 一般国道52号改築（甲西バイパス）
調査期間 平成10年5月20日～12月24日
調査面積 11,200m² (5,600m²×2面)
担当者 山本茂樹・大木丈夫・網倉邦生

本遺跡は富士川の右岸の標高242mの沖積地に位置し、通称甲西バイパスが現在の水田地帯をほぼ南北に横切って建設される関係上、調査区は水田の区画単位で行われることになった。このようなことから調査区は5区画に分けられ発掘調査が実施された。

本遺跡の東には、江戸時代より富士川を利用して舟運が発展し、大正年間に至まで県内の物資の輸送において青柳河岸は、なくてはならない存在であった。

明治21年には、大日本帝国陸地測量部によって駿沢周辺が測量され、同24年に製版された二万分の一の地図にも青柳河岸が描かれている。このことから、青柳河岸の重要性を窺い知ることができる。

本遺跡で確認された遺構は、村絵図によると河岸へ続く「御藏道」や「作場通り道」である。また、道を挟んだ左右には当時の水田が広がっていたことが明らかにされた。水田面からは、古銭・陶磁器片・煙管・銅線等が出土している。

本遺跡の南に位置する5区では、明治時代前期頃に作られたと考えられる道が見つかり、道の補強のための杭が打たれている（写真右側の長い杭）。そして杭と杭の間に廃舟となった舟材が横板として使用されていた。

更に道の下には江戸時代の終わり頃の水路と道（礫を敷いて道としている）が発見された。この道が絵図に描かれている「作場通り道」と思われる。この水路の中の更に下には、細い杭を列にして乱雑に打ち込んで水路を構築していた。水路からは、多種多様な遺物が出土し、陶磁器片や下駄・箸・桶・樽・漆器等の木製品・金属製品・寛永通寶・皇宋通寶等が見つかっている。

このことから、青柳村と富士川舟運の両者の歴史を考える上で重要な遺跡であるとともに、当時の生活を知る上においても重要な遺跡であったことが明らかにされた。



町屋口遺跡 位置図



5区水路内の杭



5区 水路内の杭の状態（北→南）

6. 藤田池遺跡

所在 地 南巨摩郡增穂町大字青柳町1808-1外

事 業 名 一般国道52号改築（甲西バイパス）

調査期間 1998年9月11日～12月25日

調査面積 4,400m² (2,200m²×2面)

担 当 者 出月洋文・湯川修一

甲府盆地の南端、富士川右岸の後背地に立地し、付近の標高は242mほどである。本遺跡は、平成8年2月実施の路線内試掘調査により確認されたもので、その成果から近世の水田跡を主な内容とすることが判明していた。ただし、近世の遺跡といいながらも本遺跡が釜無川と笛吹川の合流点に近接し、このため、いつ頃どのようにこの地の開発が進められたのか。また遺跡北東に甲州三河岸の一つの「青柳河岸」の跡があって、それとの関連はどうかなどの課題があり、本調査の成果が注目されていた。遺跡北側500mには並行して調査された町屋口遺跡がある。

調査は、今年度の調査対象区域を便宜上、北から1～3区と仮称し、用地の関係上、南端の3区を除外した2つの調査区を並行して実施した。

発見された主要な遺構は、水田跡と共に伴う畦畔や水路などであるが、江戸後期から明治初期にかかる年代の中で2面が把握された。上位面とその下層にある下位面との間で若干様相を違えており、また1区と2区とでも違った状況を示していたが、それぞれにおいて釜無川と笛吹川の合流点に近いこの地の開発の状況を具体的に窺い知ることができるものであった。

また主要な遺物には、近世～近代の陶磁器片はじめ、古銭（寛永通宝）やキセル（吸口と雁首）、漆塗りの椀などがあったが、特に注目に値するものとして1点の鉄砲玉がある。鉄砲玉は、鉛製で2区の上位面に伴うものと見られ、この時期の古文書の中に見える「猪鹿威（いのしかおどし）」を具体的に物語るものと考えられる。すなわち、西側に山地を控えた田園地帯であって、水害のはかに、イノシシなどの獣害にも取り組んでいた近世農村の一断面が読み取れるのではないかと考えられる。



藤田池遺跡 位置図



藤田池遺跡2区（2面）調査状況



鉄砲玉・出土状況

7. 原間経塚遺跡

所在地 南巨摩郡南部町本郷329
事業名 民間信仰遺跡詳細分布調査
調査期間 1999年2月26日～3月5日
調査面積 約3m²
担当者 田代孝・保坂一英・清水裕司

原間経塚の発掘調査は、民間信仰遺跡詳細分布調査の一環として実施した。この調査は、山梨県全域を調査対象として、地域共同体に伝承的に機能してきた庶民信仰にまつわる遺跡の分布を確認することが目的である。

本年度の調査は、平成10年度から3カ年にわたる調査の初年次で、民間信仰調査の調査対象を「経塚」に定め、調査の計画・準備の後、文献調査や発掘調査を実施した。さらに、「経塚」の範囲を「埋経した経塚」・「納経の経塚」・「一石経の経塚」とし、県内各市町村の文献資料収集から始め、その後、今年度の調査対象市町村で、実際の聞き取り・踏査等のフィールドワークを行った。今年度の調査を行った11市町村と43「経塚」の内訳は以下の通りである。

塩山市…10 御坂町…4 甲西町…4 大和村…4 三富村…4 勝沼町…3 双葉町…9 境川村…1 櫛形町…1 小菅村…2 南部町…1

また、3月初旬には、「一石経の経塚」である南部町の原間経塚を発掘調査した。原間経塚は、岐南地域の南部にある南部町を南北に流れる富士川右岸に広がる原間平の上、標高183m付近に位置する。

畑と竹藪に囲まれた原間経塚の記念碑を取り除くと、表面には方形の石組みと経石が露出していた。上部から経石を採取していくと、周囲が石組みで囲まれた縦68cm×横80cm×深さ85cmの堅穴（底部は黄褐色土）から、概算で約7万個余りの経石が出土した。経石はすべてが扁平な小石で、小さいものは約1.5cm四方程度しかないが、文字の確認はできた。なお、経石の洗浄と文字判読の完了は来年度以降となるが、経文の種類や書き手の人数等、興味深い成果が期待される。



原間経塚遺跡 位置図



原間経塚遺跡 経石出土状況

8. 富士見一丁目遺跡

所在地 甲府市富士見一丁目1-1

事業名 県立中央病院建設

調査期間 1998年4月1日～7月4日

調査面積 10,500m² (3,500m² × 3)

担当者 長沢宏昌・保坂一英・清水裕司・崎田 哲

富士見一丁目遺跡は、甲府市北西部を流れる荒川左岸の自然堤防上にある山梨県立中央病院地内に立地している。そのため、本遺跡一帯は水害の影響を強く受けている地域である。また、遺跡の周辺には、弥生時代から平安時代の集落跡である音羽遺跡、塙部遺跡などが分布する他、荒川対岸には近世以降の耕作面が確認された東河原遺跡があり、本遺跡と400mほどの距離で隣接している。本遺跡では昨年度中に実施した一部の本調査や試掘調査によって、上から近世以降の第Ⅰ層と第Ⅱ層・古墳時代前期初頭の第Ⅲ層、合計3層の文化層の存在が確認され、昨年度の調査区域より北への遺跡の広がりが予想されていた。

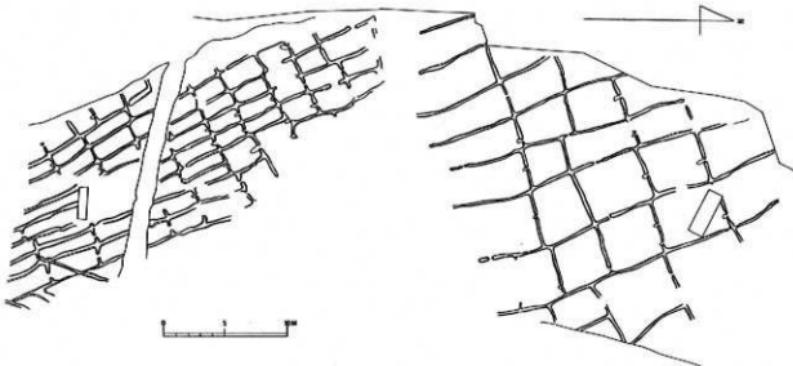
昨年度の発掘調査区域の北側が本年度の調査区域である。本調査の結果、第Ⅰ層は調査区域東側の一部にのみ確認された。この第Ⅰ層は、幅・深さとも10～20cmの溝が平行に何条にも堀り込まれたもので、畑の「畝」の可能性が高いと思われた。第Ⅱ層は調査区域全体で確認されたが、第Ⅰ層とはほぼ同様の構造で、時期的にも大差ないものと考えられた。この2つの層からは、とともに近代の陶器器が出土したが、これらの層に伴うと思われる小河川が調査区域中央や北寄りに確認された。この小河川からは、護岸工事の跡である多数の木杭が列状に出土し、場所によっては胸木やしがらみ、さらには直径30cm大の石を積んだ跡も確認された。また、出土遺物は明治時代の陶器器片が圧倒的に多く、ガラス片なども混入していた。第Ⅲ層も第Ⅱ層と同様に調査区域全体から確認されたが、調査区域の南西部分からはおよそ1600～1700年前の古墳時代前期初頭の水田が108枚確認された。このうち、完全に原形が確認できた水田は42枚を数えた。この水田は、畦畔の幅が10～20cm・高さが3～5cmで、水田1枚の平均面積はおよそ7.3m²であった。このような規模の水田は小区画水田と呼ばれるもので、その特徴としては現在の水田より1枚ごとの面積が極端に小さいということが挙げられる。さらに、本遺跡で確認された小区画水田で特筆される点は、その中央を南北に走る土手を境にして面積や形態に極端な違いが認められたことである。土手の南側の水田は土手の北側のそれよりも全体的に小規模で、小さなものはおよそ1×2m (2m²) 程度、大きなものでもその倍に至るものではなく、平均面積はおよそ3.6m²で、水田数は原形を完全に確認できただけで30枚を数えた。それに対して土手の北側の水田では、小さなものがおよそ3×3m (9m²) ほどで、大きなものになるとおよそ5×6m (30m²) もあり、平均面積はおよそ16.6m²で、12枚を数えた。また、形態的にも南側が長方形であるのに対して、北側は正方形であった。なお、第Ⅲ層で確認された水田の時期については、直接に水田面から出土した遺物が皆無であったが、第Ⅲ層東側から古墳時代初期のS字状口縁台付壺の破片が出土しているため、これらの水田の時期も同時期あると考えて差し支えないと思われる。水田面の標高は、最も高い地点で275m、最も低い地点で274mを測り、北西から南東方向に傾斜していた。この傾斜は水田の水の動きに反映されており、水口の多くが南側畦畔の中央部に存在した。水口のいくつかでは、低い方の水田側に若干の掘り込みがあった。

今回の調査で発掘された水田のように規模の異なる小区画水田が並存していた例は、青森県の垂柳遺跡が有名であるが、並存への形成要因や生産上での相違の解明は今後の研究課題の一つとなると思われる。

なお、平成10年12月21・22日の両日にわたって県立中央病院敷地西部の試掘調査を実施した。現状において試掘調査可能な5箇所を選択し、バックホーを用いて幅約1m・長さ約5m・深さ約2mのトレンチを掘った。その結果、客土の下は砂層及び砂礫層で、遺物やその含有可能性のある黒色土層の確認はできなかった。



富士見一丁目遺跡 位置図



富士見一丁目遺跡古墳水田面全体図



富士見一丁目遺跡全景（航空写真より）

9. 甲府城跡（県指定史跡）

所在地 甲府市丸の内1丁目地内

事業名 舞鶴城公園整備

調査期間 1998年4月6日～11年3月末

調査面積 約5,000m²

担当者 八巻與志夫・宮里学

本年度は、平成2年度から10ヶ年計画で開始された整備事業の9年目にあたる。整備事業が終盤に入ったことにより、調査面積は縮小し、堀や門、櫓など建物の復元が中心になりつつある。

埋蔵文化財の発掘調査は、鍛冶曲輪東・稻荷曲輪西側・同北側・数寄屋曲輪・同櫓台・坂下門周辺・本丸天守台下・二の丸（武徳殿周辺）・稻荷門下・人質曲輪・屋形曲輪（JR身延線跡地）で、石垣の解体調査については、稻荷曲輪・人質曲輪で実施した。ここでは、各調査地点のなかでも特に注目する成果を記載しておく。

【人質曲輪】

天守台の北に位置する曲輪で、江戸中期の絵図によると袋小路になっていたが、現在は本丸と通じている。平成2年に曲輪面上部を調査し、多量の金箔瓦などが出土していたが、今回はさらに下層を調査した。特に注目すべきは、栗石層より出土した石造物群である。五輪塔・宝篋印塔・石臼・地蔵・六地蔵などが栗石に再利用されており、城内石垣でこれほど多くが含まれた例はない。宝篋印塔には金剛五仏を意味する凡字が彫られ、金箔が貼られている。また、六地蔵には元号の一部が破損しているが「天文十六年（干支）八月十六日」（1547）と読める一体があり、築城以前にあった一進守に関係する石造物群と考えられる。また、天守台東面石垣が北側に延長していることが判明し築城段階での設計変更や江戸期になってからの改修の可能性が考えられる。

【屋形曲輪】

屋形曲輪を囲む堀の調査を実施した。堀跡の残存状況はかなり良好で、未調査周辺地域の遺構も残存している可能性が極めて高いので今後留意する必要がある。

堀は、南北15m、北端で西に90°折れ、西に30m続く。上部は削平されて存在しないが、堀幅約5m深さ約1mを計る。底部は軟岩盤を削り平坦で、壁は平均45°で立ち上がる。覆土からは鬼瓦を多量の瓦が出土し、湿地であることから木製品（棚・狹間部材）や鉄製品、歯骨及び慶長一分金が出土している。

【本丸天守台下】

平成9年に続く調査である。調査は石切場（岩盤）まで実施し、遺構としては瓦溜2基を検出した。主な出土遺物としては、築城期段階の違い鷹の羽を始め桐紋の飾り瓦、鬼瓦などが多く出土している。また、線刻画や石垣用石材を切る出す際に使用した、鉄製の楔も出土している。



甲府城 位置図



人質曲輪調査状況（北より）



屋形曲輪調査状況（東より）

10. 上の平遺跡（第7次）

所在地 東八代郡中道町大字下向山字上の平1135

事業名 甲斐風土記の丘整備（有価物分別施設）

調査期間 1998年4月20日～6月11日

調査面積 200m²

担当者 熊谷栄二・市川恵子

遺跡は甲府盆地の南縁に発達した曾根丘陵の中央に位置する東山の丘陵上の平坦面に立地する。標高は約335mを測る。

今回の調査は、甲斐風土記の丘の整備事業に伴うもので約200m²を対象として行った。位置的には、1993年に行われた第6次調査区の南隣にある。遺構としては、縄文時代では前期後半の諸磧b式期の集石土坑1基、中期後半の曾利IV式期の住居跡1軒、土坑5基がある。このなかで前期後半の集石土坑からは焼けた礫や、磨石・凹石などの石器が多く出土した。土坑の中層部には大きめの平たい礫が敷かれ、その上面は著しく焼けていた。また覆土の中にも炭化物や焼土が多く認められた。中期後半の住居跡から出土した炉体土器は、バラバラになった形で検出された。これは住居を廃絶する段階で炉を閉じるなんらかの儀式がおこなわれ、意図的に破壊されたものと考えられる。古墳時代初頭では方形周溝墓2基、土坑5基、古墳時代後期の土坑1基がある。方形周溝墓のうちの1基からは周溝より、供献された壺が出土した。この他、調査区中央部分をほぼ東西方向に走る地すべりの痕跡が確認された。この地すべりの時期については、落ち込んだほうの地層には黒色帯（立川ローム層第2暗色帶に比定される）が完全に残っており、さらにその上に黄褐色ロームの堆積がみられることから少なくともこの黒色帯上部のATの年代以降ということになり、またこの地すべりの上に造られた方形周溝墓には地層のズレがみられないことから、およそ2万5千年以降古墳時代初頭以前に起こったものと考えられる。第6次調査でも地層の動きによってできたと考えられる地形のくぼみが発見されており、これらの地層にみられる痕跡はこの丘陵一帯の地質的な性格をよく表しているといえる。注目すべき遺物としては、上述の黒色帯中から発見された旧石器時代の黒曜石の調片2点、縄文時代前期と考えられる朱塗りの耳飾り、同中期初頭の河童形土偶の頭部、同中期後半の土偶の頭部、時期不明だが土鈴と考えられる破片などがある。今回の調査区は上の平遺跡のある丘陵の最も縁辺部にあたる緩斜面地であるが、このような丘陵のはざれにまで遺跡の範囲が続くことがはっきりとした。



上の平遺跡 位置図



壺（1号方形周溝墓の周溝より出土）



地すべりの痕跡

11. 諏訪尻遺跡（第2次調査）

所在地 東八代郡境川村藤塙字諏訪尻3883外

事業名 県営分譲地造成

調査期間 1998年6月22日～10月20日

調査面積 約1,000m²

担当者 熊谷栄二・市川恵子

遺跡は甲府盆地の東南部、曾根丘陵上の緩斜面に位置し、標高は約325mを測る。昨年度からの継続調査である。今回調査を行ったのは、縄文時代前期後半の諸磯a式期の集石土坑1基、同じく土坑1基、諸磯b式期の住居跡2軒、弥生時代末の住居跡4軒、古墳時代初頭の住居跡1軒、古墳時代中期の円墳1基の他、詳細時期不明の集石土坑2基、土坑約10基や縄文時代前期後半以降弥生時代末以前の風倒木の痕跡も認められた。諸磯b式期の集石土坑からは土器とともに石器が出土している。またそれとほぼ同時期と考えられる土坑からは、同じく土器とともに凹石が出土しており、これらの出土状況は墓坑である可能性を示唆している。住居跡・土坑を始めとして包含層からも出土している諸磯a式の新段階から諸磯b式の古段階にかけての土器は、県内においてもまだ出土例が少なく、注目すべき資料となる。また、弥生時代末の住居跡のうち1軒は焼失住居であり、この住居跡からは土器などの遺物はほとんど出土しておらず、炭化材も住居の南半分でのみ確認された状態であることから、住居を廃絶したのちに覆屋に火をつけ焼き払い、焼失後、炭化材を一方に寄せて片づけたと考えられる。昨年度の調査で見つかっている焼失住居ともあわせて見ると、それぞれの焼失状況に違いが認められるのも興味深い。特筆すべき遺物として、縄文時代前期後半では定角式磨製石斧や水晶製の石鎌、諸磯b式併行の北白川下層式系統の土器片などがあり、弥生時代末～古墳時代初頭では土製紡錘車や様々な形をした土製装身具、ミニチュア土器などがある。また、弥生時代末と考えられる17号住居跡からはつくりが全く同じで少しだけ大きさの異なる台付壺が2個一緒に漬れた状態で出土しており、興味深い。なお、時期は特定できないがふいごの羽口も1点出土している。昨年度の調査とあわせて遺跡を概観すると、弥生時代末から古墳時代中期にかけては方形周溝墓1基、円墳2基と住居跡が25軒存在したことからこの一帯が権力者の墓域であったのと同時に居住域でもあったことがわかっている。住居跡のなかには長軸約13m（推定）、短軸約10mという該期においては県内最大級規模のものを含んでおり、またこの住居は不意の出火で激しく焼け落ちた状況を示していることから、他集団との抗争もあったのかもしれない。縄文時代についても、当初は包含層のみだと考えられていたものの、諸磯a式期から同b式期にかけての集石土坑や住居跡など遺構としてその生活の痕跡を明確にとらえることができた。特に諸磯a式期の資料は県内でもまだ少なく本遺跡の資料も該期の研究に一石を投じることとなろう。



諏訪尻遺跡 位置図



調査区 全景

12. 桂野遺跡（第3次調査）

所在 地 東八代郡御坂町大字上黒駒字桂野大道上1901外

事 業 名 国道137号線改築（上黒駒バイパス）

調査期間 1998年8月6日～12月11日

調査面積 12,000m²

担当者 野代幸和・長田雅巳

遺跡は、御坂山塊から甲府盆地に移る地点に存在する桂野台地上に占地する。この台地の東側には国道137号線と金川が並走し、標高は515～530mを測る。

今回実施した調査は、昨年度実施した調査区の北西部に隣接した約11,500m²と南東部の約500m²の調査対象面積のうち、北西部で基盤整備によって破壊されている約2,200m²については試掘調査で対応した。

本調査を実施した地点から発見された遺構としては、縄文時代前期末葉十三菩提式段階の住居跡2軒、中期初頭五領ヶ台Ⅱ式段階の住居跡5軒、中期中葉井戸尻Ⅱ～Ⅲ式段階の住居跡が1軒、弥生時代中期後葉の住居跡1軒の合計9軒発見できた。その他に縄文時代前期末葉から後期前葉段階に比定される土坑が約300基と、古墳時代まで機能していたと考えられる沢跡が2箇所認められた。遺物は、一般的なものとして石鎌、石錐、石錘、磨石、土器など縄文時代に所属するものが多く、特殊なものとして赤色塗彩された土製環状耳飾や土偶が出土している。

全体的には、昨年度と同様に縄文時代前期末葉から中期初頭段階に位置付けられる遺構が中心で、該期における集落構造としてキャンプサイト的タイプが主流の中で、本遺跡では規格性があるしっかりした住居を持つ居住域と、周囲に墓坑、貯蔵穴などの付属施設を伴った長期的な定住を示すもので、極めて希な構造的特徴を持っている。前期末葉に属する第21・22号住居跡では、在来のものと外来系の大歳山式との併出関係も窺え、昨年度調査した第7号住居跡との関連性も示唆される。また、従来的な資料とともに縄文のみを主体とする粗製タイプのものも併出しており、本県ではまだあまり実態が明らかとなっていないタイプで興味深い。

また弥生時代中期後葉の第19号住居跡については、その発見例はとても少なく、構造的にも検討を要するものである。この住居跡内からは、信州伊那地域に分布を持つ土器が出土しており、該期における人々の動きとの物の流れを探る上で大変興味深い発見である。

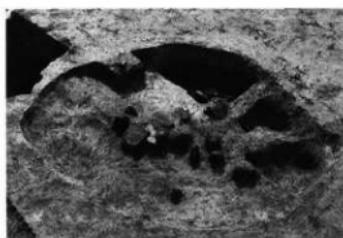
バイパス建設関連における桂野遺跡の調査は、本年度をもって一段落し、来年度からは本格整理作業に入る予定である。



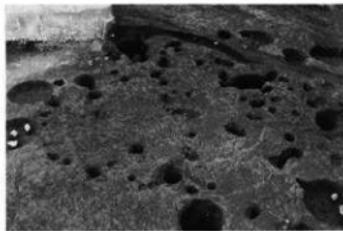
桂野遺跡 位置図



調査状況



第19号住居跡（弥生時代中期）遺物出土状況



第21～23号住居跡（縄文時代前期十三菩提式）

13. 西馬鞭遺跡

所在地 東八代郡御坂町上黒駒2903外

事業名 国道137号改築（上黒駒バイパス）

調査期間 ①試掘調査 1998年7月27日～7月31日

②本調査 1998年10月5日～12月10日

調査面積 ①8,000m² ②1,000m²

担当者 野代幸和・長田雅巳

本遺跡の所在する御坂町はその町域の67%が山地であり、残る部分が金川扇状地と天川扇状地からなる平地である。御坂山脈の八町峠付近より源を発する金川は、多くの支流を集め12kmほど流れ下った若宮地内において山地から扇状地に入り、さらに7kmほど流れて笛吹川に合流する河川である。金川は山地で深い谷を刻んでいて、右岸は断崖面で急斜面となり、左岸は山麓斜面が多く河岸段丘が発達している。金川の谷が広がり、山地から平地になる若宮付近の左岸一帯には桂野台地と呼ばれる台地があり、本遺跡はこの台地から緩やかに流れでた端部に位置し、標高は約550mを測る。また、この台地縁辺部は大小の沢が入り組んでおり一定でなく、本遺跡の位置する地点も沢部にある。

この発掘調査は、昭和63年に開通した中央自動車道一宮・御坂インター供用により建設された国道137号のバイパス延長に伴う事業であり、今年度7月27日より5日間実施した試掘調査を受けて、約1,000m²の面積を対象に10月5日より実施した。

調査の結果、黒褐色系と黒茶褐色系の包含層が確認された。黒褐色系の包含層からは平安時代の土師器や須恵器、手づくね土器を中心に遺物の分布が認められた。また、この面から焼土を含む土坑が確認され、この遺構からは灰釉陶器、黒色土器等が密集して出土している。黒茶褐色系の包含層からはほぼ前面にわたって、縄文時代早期の石器、同中期初頭から後葉（五頭ヶ台式、曾利IV・V式）の土器、石器、同後期前葉（堀之内式）の土器の出土が確認された。

今回の調査から、本遺跡は立地的には窪地がかった沢状の地形を呈しており、また、遺構もほとんど確認できなかったことから、定住を伴う生活の場とは考え難く、何らかの一時的な生活の場、もしくは祭祀的な場として利用されていた遺跡と考えることができる。

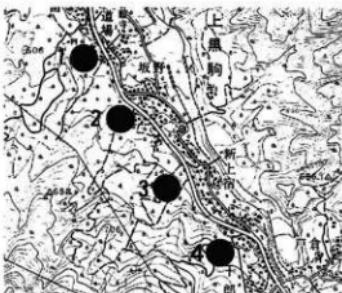
国道137号改築（上黒駒バイパス）工事対象地域試掘調査

所在地 東八代郡御坂町上黒駒坂野、新上宿、十郎地内

調査期間 1998年8月3日～8月4日（十郎地内）、8月4日～6日（新上宿地内）、8月6日（坂野地内）

調査面積 十郎地内40m²（4,200m²）、新上宿地内380m²（4,500m²）、坂野地内2,400m²

担当者 野代幸和・長田雅巳



1. 西馬鞭 2. 坂野 3. 新上宿 4. 十郎

14. 下西畠遺跡

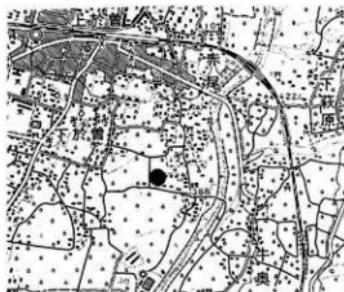
所在地 塩山市赤尾769外
事業名 国道411号改築（塩山東バイパス）
調査期間 1998年5月19日～7月3日
調査面積 800m²
担当者 小林孝子・米山真

甲府盆地の東には大菩薩嶺をはじめとする山々が嶺を連ね、そこからは幾筋もの川が流れ出している。重川もそのように流れ出した川の一つで、重川扇状地を形成しながら南流し、やがて笛吹川に合流する。

本遺跡はこの重川沿いのなだらかに南下する丘陵上に立地し、標高は392m前後を測る。全対象面積3,300m²のうち、すでに前年度2,500m²の調査が終了しており、本年度は残りの800m²について発掘調査を行った。前年度の調査では绳文時代前期末から中期初頭の住居跡や土坑、古墳時代前期の住居跡や方形周溝墓4基等が確認された。とくに方形周溝墓は古墳時代前期末に位置づけられるもので、周溝の南側中央部にブリッジを持つものが2基ほど存在した。またブリッジ付近からは底部を穿孔する壺などの土器がまとまって出土した。

今年度の調査区は前年度の調査区の南側に位置する。発掘調査の結果、新たに古墳時代前期の住居跡2軒、平安時代の住居跡4軒、時期不明の溝1条、土坑数基を確認した。このうち古墳時代前期の住居跡は前年度確認したものと同時期のものであり、方形周溝墓よりも若干古い時期のものである。平安時代の住居跡は南及び南東コーナーにカマドを持ち、床は固くしまっている。いずれの住居跡からも遺物の出土は多いとはいえないが、灰釉陶器や杯、壺などの土器が見られた。また古墳時代の住居跡の覆土中からは、13世紀に属する青磁片が数点出土したが、それに伴う遺構を確認することはできなかった。

今回の発掘調査では、昨年度見られた方形周溝墓が出土しなかった。このような事実は、昨年度調査した第4号方形周溝墓が墓域のはば南限であることを意味するものである。一方昨年度の調査区には存在しなかった平安時代の住居跡が比較的まとまって出土した。これらの住居跡は、出土遺物から平安時代の後葉に営まれたものであることがわかっている。同時期の住居跡は、本遺跡の北方約200m地点に位置する西畠遺跡や南方約350m地点に位置する大木戸遺跡でも確認されており、小集落が点在して広い範囲に存在することを知ることができる。



下西畠遺跡 位置図



古墳時代住居跡



古墳時代土器出土状況

15. 大木戸遺跡

所在地 塩山市下於曾269-1外
事業名 国道411号改築（塩山東バイパス）
調査期間 1998年7月7日～11月5日
調査面積 650m²
担当者 小林孝子・米山真

甲府盆地の東に軒を連ねる大菩薩嶺は、塩山市を南流する重川の水源になっている。本遺跡はこの重川右岸で、連続する小山状の高台の一つに所在する。標高390m前後を測り、南向きの緩斜面に立地する。下西畠遺跡からは直線距離にして約350mほど南に位置している。

発掘調査の結果、縄文時代前期末の住居跡13軒、中期の住居跡3軒、平安時代の住居跡2軒、古墳時代前期の溝1条、土坑、溝等が確認された。互いに複雑に重複しており、遺構の全体像を知ることができるものはない。

縄文時代前期末の住居跡は円形で、壁は床面向かって緩やかに傾斜するすり鉢状を呈する。住居跡によっては、床面のはば中央部で若干の焼土を確認することができた。いずれもわずかに焼土が残存している程度であるため、地床炉を用いていたものの、短期間の使用であったと推測される。柱穴は壁面沿いに配置されており、いずれも深い。第1号住居跡はすり鉢状を呈するものの、確認面から床面までは20cm前後と非常に浅かった。しかし住居跡中央部から壁面側に向かって幾重にも重複して多量の遺物が出土した。いずれも諸磯式期に位置づけられるものであり、出土遺物の間にほとんど時間差は感じられない。出土土器には口縁部に孔のめぐら直径50cm前後の浅鉢や大小の深鉢等が多数見られ、出土状態からこれらは廃棄されたものであると推測される。またこれらに混じって、黒曜石やチャートを石材とした石鏃、また磨製石斧・凹石などの石器も出土している。

さらに第1号住居跡に隣接する第3号住居跡や第5号住居跡からは、諸磯式期に位置づけられる土器群が出土した。遺構は調査区外へ広がるため、詳細について明らかにすることはできなかったが、集落がある程度継続して営まれたことを知ることができる。塩山市内ではもちろん、山梨県内においても該期の資料が多いとはいはず、これほどまとまった資料を得ることができたことは非常に重要な成果である。今後出土遺物の整理等を通して、さらに多くの発見があるものと思われる。

縄文時代中期の住居跡3軒は重複して確認された。このうちもっとも古い住居跡は落成式期～新道式期のもので該期の深鉢を利用した埋甕炉が認められた。他の2軒は藤内式期～井戸尻式期の土器を多量に出土し、それぞれ石囲炉を用いていた。いずれの住居跡も堀り込み深く、確認面から床面までは約50cm程度であった。柱穴は住居跡のほぼ中央に位置する炉を、取り囲むように配置されていた。特筆できる出土遺物としては水晶製の石鏃や土偶等が挙げられる。

平安時代の住居跡2軒のうち、第6号住居跡は洪水による被害を受けていると思われ、砂礫の堆積が著しく、それらに混じて該期の細かな上器片が多量に出土した。また縄文時代中期の住居と重複する該期の溝はやはり砂礫が堆積しており、その中から灰釉陶器や綠釉陶器を始めとして該期の遺物が多数見られた。砂礫層には堆積の痕跡は見られず、これらの遺構が一回の洪水により埋め尽くされたことを知ることができる。平安時代の集落はこれらの住居跡を北限として、さらに南側緩斜面上へ広がるものと思われる。今回の調査では来年度以降の発掘調査の様子を知る上で、貴重な資料となった。

古墳時代前期の溝は幅約5mを測り、東から西へ調査区を横切るような形で所在する。底面付近よりS字状口縁台付甕（以下S字甕）や壺・高杯・器台等がまとめて出土したが、遺構の性格については不明である。S字甕の形態から古墳時代前期末葉のものと考えられ、下西畠遺跡の方形周溝墓群とはほぼ同年代のものであると思われる。



大木戸遺跡 位置図

16. 西畠遺跡

所在地 塩山市赤尾680外

事業名 国道411号改築（塩山東バイパス）

調査期間 1998年11月4日～12月18日

調査面積 700m²

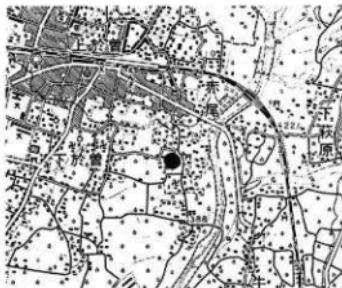
担当者 小林孝子・米山真

塩山市は甲府盆地の東端で、大菩薩嶺の南麓に位置する。大菩薩嶺は水源を発する重川は塩山市を南流し、重川扇状地を形成しながらやがて笛吹川へと合流する。

本遺跡はこの重川右岸の一段高くなった台地上、標高397m前後の地点に所在する。調査区は北から南へ緩く傾斜しており、北方約150mの地点には下西畠遺跡が位置する。またすぐ北側には中・近世に黒川金山衆であったと伝えられる保坂家の屋敷跡が所在し、南西には八代氏を継いだ武田伊予守基經の屋敷跡があったとされる涌泉寺が所在する。

調査区は既存の道によって南北に分けられる形となった。発掘調査の結果、平安時代の住居跡7軒、溝1条、近世から近代にかけて利用されていた道路跡等が確認された。このうち平安時代の住居跡は、主に北側の調査区にまとまって位置していた。遺構確認面までは深いところでも20cm程度と非常に浅く、遺構の残存状況はそれほど良い状態ではなかった。住居跡はいずれも平安時代後葉に位置づけられるもので、下西畠遺跡や大木戸遺跡のものとはほぼ同時期であると思われる。カマドはいずれの住居跡においても北側および南側に付設されており、両側の袖部分のみ礫が用いられていた。住居跡によっては、西側の壁面沿いに貯蔵穴を設けるものも存在する。床面は非常に軟弱なものと、張り床を施すものとが見られた。また調査区東側では洪水による砂礫層が非常に厚く何層にも堆積しており、これらから平安時代の摩耗した土器片が出土した。地元の人の話では明治33年の洪水により、西畠遺跡を乗せる台地下が水没したことである。このような様子から該期より数回にわたって重川の氾濫による洪水がこの地を襲い、人々は丘陵上でも若干奥地を選地して集落を営むことで洪水の被害を避けたものと思われる。

調査区北側で発見された道路跡は既存の道とつながっており、現在調査区東側に存在する主要道路建設前に利用されていたものであると思われる。道路幅は約1m前後と極めて狭いものであり、主に西側を石垣により区画している。もとは3段程度石が積まれていたものと思われるが、ほとんど崩れており基底部のみを確認した。石材には大きな矢穴の施されるものが見られ、もとは同一の石であったものなども認められることから、石材として現地へもたらされた石がこの場で加工され、石垣として積まれた可能性がある。また一時期水路として利用していた時期もあるらしく、底面には砂礫の堆積が見られる箇所もあった。これらの砂礫層中や石垣の中からは、18世紀中頃から後葉に位置づけられる磁器片等が出土しており、石垣の積まれた年代を考え上で一つの定点になり得るものと思われる。なおこの道路は調査区を南北に区切る道に合流しており、畠等の区画にも合っていることなどから、古くから勝沼方面へ抜ける主要道として利用されていたものと思われる。



西畠遺跡 位置図



道路跡検出状況

17. 平林 2号墳ほか

所在地 東山梨郡春日居町鎮目字平林21-4外

事業名 西関東連絡道路建設

調査期間 平成10年4月16日～10月23日

調査面積 700m² (平林2号墳)

2,450m² (その他試掘調査)

担当者 吉岡弘樹 深沢容子

平林2号墳は、甲府盆地北側縁辺部の春日居町吾妻山の裾部(海拔305m)に占地している。

古墳の周辺地域には、現在のところ40基あまりの古墳が確認されており、これらのグループは春日居古墳群と呼ばれている。さらに古墳群は現在のところ数基毎に、平林、保雲寺、笹原塚など9支群に細分されており、当墳は日向塚古墳、入定塚古墳ら9墳とともに平林支群に属している。

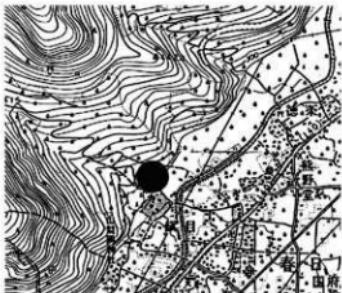
発掘調査は、平成10年4月16日より大藏經寺山春日居側トンネル開口部からの路線内試掘調査から開始された。その結果、平林2号墳の他には遺跡などは確認されなかった。

平林2号墳の調査前における現地状況は、ぶどう棚が設置された関係上、墳丘は墳頂、裾部や前庭部といったるところで大きく削平されており、その全貌を明らかにするのは、困難であろうと容易に見て取れる状況であった。

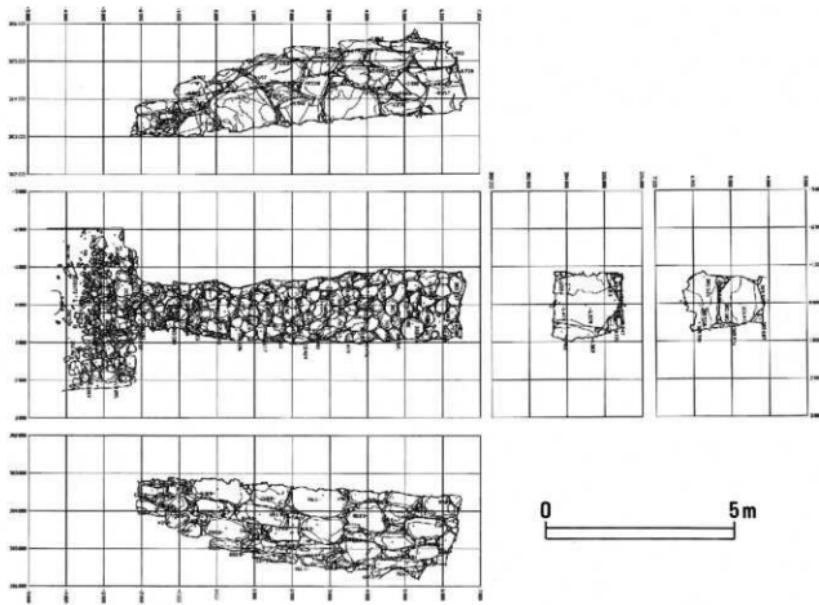
調査の結果、古墳は南東方向に開口する直径約16～17m前後の土盛り円墳と判明した。墳丘の構築には、内部構造物としての石積みのほかは、他地域からの土の搬入などは明確には認められなかった。しかし、上層部では土壌の軟弱化が進行していたもののわずかに版築が確認された。また、下方においては、5～10cm厚の凝灰角礫岩のブロックを含むローム質土と暗茶褐色土+ローム質土の互層からなる版築土層が明確に検出された。石室は無袖型横穴式(羽子板形状)で、全長8.60m、最大幅1.85m、最小幅1.40m、最大高2.10mを測る。天井石は、戦後の開削でほとんどが持ち去られており、わずかに奥壁から2石残存しているのみであった。床石については、30～40cmの扁平な割石を隙間無く敷き詰めていた。しかし、このような状況とはいえ、次のような多種に富む副葬品が検出された。まず装身具類であるが、ここでは、管玉1点、切子玉1点、勾玉3点、丸玉・小玉200点以上、金環11点が出土した。武器類では、直刀1振、鞘尻1点、柄頭1点、鉄鎌20点以上、武具類としては小札100点以上が出土した。この他には、当地の他古墳からも多く出土する馬具類が検出された。その数は、轡4点、鞍具4点や雲珠2点、辻金具1点、などに及ぶ。さらに、良好な状態とはいえないが、石室中央や奥壁寄りから直径約5cmの銅鏡が2面出土していることも特筆されよう。さて、築造年代を決定するに重要な須恵器があるが、石室内からはほとんど出土しておらず、石室入口部分外側周辺の前庭部があつたであろう部分から6世紀後半から8世紀前半までの环、环蓋、高环、大甕などさまざまな機種が多量に検出された。ここで、検出された須恵器は周囲に隣接した古墳が無いことから当墳の石室内から持ち出されたか、前庭部で行われた墓前祭で使用された可能性が非常に高い。

これらの事柄から、当墳は6世紀後半頃に築造されて8世紀前半まで追葬が行われたと推測される。

本古墳は、墳丘盛土の削平や天井石の持ち出し等で外見こそ姿が変容してはいたが、その残存していた石室規模は極めて良好であり、鏡2面の副葬は県内の後期古墳の中でも注目すべきことである。また、豊富な金環や勾玉類、馬具・武具類についても被葬者一族の優位性を示すのに十分な資料であろう。今後、今回得ることのできた資料を分析研究することによって、本県の後期以降の古墳研究に一石を投じることは間違いない。



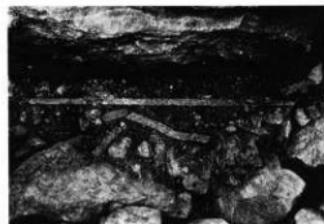
平林2号遺跡 位置図



調査前の古墳



調査風景



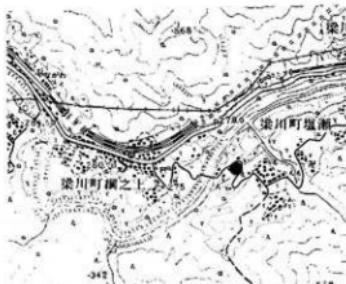
直刀・小札検出状況



馬具類等検出状況

18. 塩瀬下原遺跡

所在地 大月市梁川町塩瀬955外
事業名 桂川流域下水道終末処理場建設
調査期間 1998年6月8日～1999年3月17日
調査面積 約3,000m²
担当者 伊藤伸一・笠原みゆき



塩瀬下原遺跡 位置図

遺跡の存在する大月市梁川町は、大月市の東部・北都留郡上野原町との境にある。その中央に流れる桂川を挟んで左右に細長く集落が形成されており、その右岸の河岸段丘の中位段、標高約240mに位置している。塩瀬下原遺跡の調査は今年度で4年目となり、昨年までの調査区とは市道を挟んでほぼ南の位置にある。調査の結果、平安時代と縄文時代の2つの文化層が確認された。

平安時代では、焼土坑33基、土坑19基・配石遺構5基・集石遺構11基・溝状遺構8条などが検出された。焼土坑は大きさに統一はないが、平均的に直径1m×短径0.8mの楕円形である。遺物を作う例が少なく、その性格や時期を特定することが難しい。そのため、土師器壺の破片を含む1号焼土坑内の焼土の化学分析をおこなった。その結果、土坑の周辺の土壤より焼土中に含まれるリンの濃度が明らかに高いことが報告された。このことから、土坑の中でなんらかの動植物が焼かれたことが推定される。また、25号焼土坑は、1.25m×0.75mの楕円形で須恵器壺の破片が重なり合って出土した。焼土はほとんど含まれなかつたが、炭化材がその上下に広がりサンドイッチ状になっていた。このような土坑は1基のみで、その他は1号土坑と同様である。出土した少ない土師器片から、焼土坑の存在した時期は10世紀頃と考えられる。

縄文時代では、住居跡1軒・土坑7基・配石遺構10基・遺物集中区などが検出された。今回の調査では、特に、縄文時代後期の大形の敷石住居跡が注目される。この住居跡が注目される理由は、その大きさと、炉を中心にして敷石が縦横4.2mの十字形に配置されていることで、発見例はほとんど無いといえる。また、この時期の大形の敷石住居跡から発見されることの多い、居住部の中に小さな礫を方形に並べる環礫方形配石遺構とよばれるものが、敷石と敷石の間からほとんど壊されることなく発見されたことも特筆される。そして、居住部の奥壁側には長さ約0.6m・幅0.25mの礫百数十個が幾重にも組まれ、入口部分に向かって環状に巡る様子も確認できている。最後に敷石住居跡の敷石を全部取り外してその下部を調査したところ、炉の西南部分に焼土と炭化物の広がりがあった。この特に焼けている部分2カ所から住居跡と同じ時期の縄文土器がそれぞれほぼ完形で発見された。土坑の底部には、それぞれ炭化材がびっしり検出でき、木材を敷きつめた上に土器を設置したのではないかと想定される。住居をつくる前に、地鎮祭的なことをおこなった跡なのだろうか。これらの調査を踏まえ、居住部は直径7mの円形で、3×3mほどの不整形な柄がつく柄鏡形敷石住居が最初に作られ、その後、その上に、直径約8m×短径約7.5mの配石遺構を作り直したのではないかと考えられる。しかし、発掘調査が終了したばかりで十分な遺物の検証や、遺構自体の細かい観察もできていない状態であり、住居跡と配石遺構の関係については考慮されるべき点が多い。この他の遺構として、配石遺構が10基ほど存在している。配石遺構は、敷石状に石を配置するものと、列石状に配置するものがあり、後者の中の9号配石遺構では、直径0.8mほどの岩の周辺に、平石や丸石を列状に並べ弧を描くように配慮していき、その途中には完形の石皿などを使用していた。弧の内側から、焼土が2カ所と土器が1点確認された。また、土坑や配石遺構の確認面から、単体で土器が発見された。これは、明確な土坑を持たず、ほとんど土圧で潰れている。これらの遺構はほぼ1号住居跡と同じ時期に存在したと思われる。今回、山梨県の敷石住居跡研究の中に貴重な資料が追加された。特に郡内地域は保存状態の良好な資料が多く、注目される地域であるため、この住居跡の存在する意味は大きいといえる。



1号住居検出状況 その1



1号住居検出状況 その2

19. 長峰砦跡

所在地 北都留郡上野原町大門1143外

事業名 中央自動車道改築

調査期間 1998年5月7日～8月31日

調査面積 9,000m²

担当者 出月洋文・湯川修一

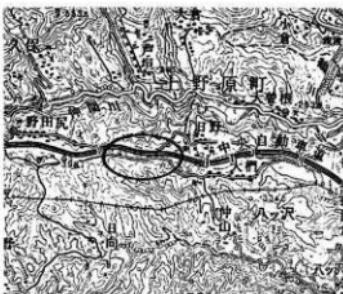
本遺跡は、中央自動車道談合坂サービスエリアの東約2kmの地点に位置し、標高は約340mから380mを測る。中世にはすでに「長峰」と呼ばれた、東西に長く伸びる尾根状の地形に立地し、近世以降には「甲州道中（甲州街道）」が通過する交通の要衝の地であった。

遺跡は、中央自動車道拡幅計画のショートカット区間の東西700mほどの範囲にある。本年度の調査は、江戸後期に描かれた「大門村絵図」などでも知られる長峰砦跡の中心部一帯を対象として進めたが、8月末までに、平成7年度に部分的に着手して以来の現地調査のはとんどを終了した。

今年度の発掘調査の成果としては、主郭部と日される一帯についてでは、以前の中央自動車道本線工事や工場造成などによって、調査前の予想を上回って激しく改変を受けていることが判明した中で、比較的よく往時の姿をとどめる堀切や横堀の跡などが見られた点があげられる。

推定主郭部は、東西に土星状の高まりがあるほかは、柱穴等の構造は確認されず、薄い表土下に寛水通室が散在したのみであった。この主郭部の北側斜面中位にはコンタ方向に走る横堀が確認されたが、これも堀底付近に近世陶器が遺存しており、江戸後期までは旧状をよく留めていた可能性がある。推定主郭部より東よりで尾根を切断する形の堀切跡も明らかになった。堀の平面形は三日月形で、堀底が平坦なことから通路の機能も持ち合わせていたように見られる。この堀切跡の底に近い部分からは、2点の青銅製の鉄砲玉が出土した。戦国の遺物としてはこれ以上になく、また青銅製のものは本県では類例が希れで今後の分析がまたれる。

ほかに砦跡の傍らを通過する、近世以降の旧甲州街道に関連すると見られる道路構造も確認された。



長峰砦跡 位置図



調査風景 堀部



堀部出土の鉄砲玉



旧甲州街道（古道と現町道）

20. 安楽寺東遺跡

所在地 大月市賀岡町強瀬890-1外

事業名 中央自動車道改築

調査期間 1998年5月11日～8月13日

調査面積 約2,000m²

担当者 小林公治・古屋勝之

本遺跡は、大月市の桂川左岸に位置し、中央自動車道の南に接し、標高は345mを測る。

調査の結果、平安時代と江戸時代の遺構・遺物が確認された。

平安時代の遺構には溝がある。これは、幅約1.5m、確認面からの深さは30cm程度で、東西辺7m以上、南北辺22m以上の規模でL字型に掘り込まれていた。そして、この溝の底面部分には細かな砂礫が敷石状に広がる部分があった。また、この溝の東辺にはさらに数条の溝が同方向に重なるように検出された。なお、時期の特定は困難であるが、段丘崖にもV字状の溝が掘り込まれていた。この時代の遺物としては、土師器（甲斐型壺）等が溝内などから出土している。

ところでこうした形状の溝は多くの場合、地域有力者の屋敷や寺院などを取り囲む方形の区画溝であることが多い。今後この溝がどういったものなのか、その性格の一層の解明が必要と考えられる。またこうした可能性を考慮すれば、当遺跡の場合、居住構造や建物部分は調査範囲外の西側畠地や中央自動車道下に埋没していることが推測される。

江戸時代の遺構は墓坑8基、土坑15基などがある。墓坑は4基ずつ二つの群にまとまり、一部は墓が重なり合っていた。総じて規模は一辺1m弱、確認面からの深さ20～80cm程度の方形のもので、遺存状態は大変良く、内部にはいずれからも人骨が確認されたほか、副葬品の銅・鉄錢、キセルなどがほぼ原位置から出土している。これらの墓域は、当時の強瀬集落住民が所有していた自分の畠の一部に作っていたものと考えられ、また墓の大きさや人骨の出土状況から全て座塚で、その中に立て膝の状態で納められていたと判断される。さらに切り合ひ関係の存在から、一家系の人間が順に埋葬されたと推測され、かつ二群に分かれていることから2家族の墓域であると推測されよう。

これらの墓坑により、この地域での伝統的な埋葬方法について具体的な復元が初めて可能になった。また形質人類学的な分析によって明らかにされる被葬者の性別・年齢・身体的特徴といった諸点から、これらの墓に埋葬された人々の血縁関係などが復元されよう。加えて、これらの人骨に対し、炭素・窒素同位体比による食性分析も実施する予定であり、現在では民俗学的にも文献史にも明らかにすることが困難な伝統的な食生活や地域生業の実態について、多くが解明されると期待される。



平安時代の溝



墓坑内人骨出土状況

21. 西の上 C (原平) 遺跡

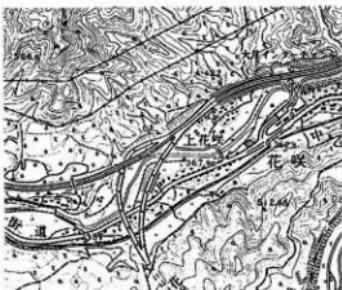
所在 地 大月市大月町真木779-6 他

事 業 名 中央自動車道改築

調査期間 1998年10月1日～12月24日

調査面積 2,000m²

担 当 者 長沢宏昌・崎田 哲



西の上C遺跡 位置図

本遺跡は、桂川支流の笹子川左岸に南面する標高約415mの段丘上に位置する。この地は、昭和59（1984）年1～11月に大月市教育委員会によって実施された、工場誘致のための造成工事に先立つ発掘調査から、既に「原平（はらだいら）遺跡」として知られている。

原平遺跡では、これまでの調査により縄文時代・奈良・平安時代の住居跡約100軒が確認された。中でも縄文時代早期末の竪穴住居跡は約60軒が検出されており、下吉井式期の集落としては他に例がない。また、遺物としても国内最古のパン状炭化物が検出されるなど話題を呼んでいる。

今回の調査区域は、この原平遺跡の周縁部にあたり、昨年度には北側隣接区域を大月市教育委員会が「原平遺跡」として調査を実施した経緯がある。

調査では、東西約2,000m²の帶状の区域から、住居跡8、土坑150、ピット224を検出した。ピットは遺物を伴わないため時代の選定は難しいが、発掘時の状況から比較的新しい時代のものと考えられる。その他は遺構及びそれに伴う遺物から、縄文時代早期末・中期初頭及び平安時代に位置づけられる。

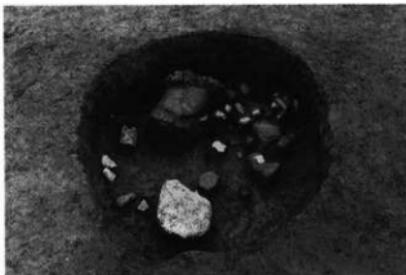
住居跡については、検出した8軒のうち6軒が縄文時代早期末のものである。早期末の住居跡からは下吉井式を中心に東海系木島式・厚手無文土器などが出土している。石器は、定型的石器はほとんどなく、礫器が圧倒的である。また、水晶片が数点出土しており、中に1点だけではあるが石鐵も含まれており、興味深い。炉跡の焼土は、水洗選別によって精査し、微量ながら炭化種子を検出している。当時の食生活をはじめとする文化の一端を見る上で、有効な資料の一つになり得るものと考えられる。また縄文時代早期末の住居1軒の炉跡については、黒曜石片を大量に含んでおり、当時の石器製作工程の様相を彷彿させるものであった。

土坑に関しては、150基の殆どにおいて遺物の検出は認められなかったが、縄文時代中期土坑1基からは、完形の五領ヶ台式（縄文中期初頭）土器一点を検出した。この土坑については、層ごとにサンプルを検出し、リン分析を行っているので、近日中に分析結果が得られるものと考えている。

前述したように、本遺跡は、その立地条件及び遺構・遺物から「原平遺跡」の一部であると認識できる。



5号住遺物出土状況



18号土坑遺物出土状況

22. 金山金山遺跡

所在地 南都留郡秋山村金山奥山4519外

事業名 金山川砂防工事

調査期間 1998年10月5日～12月22日

調査面積 1,000m²

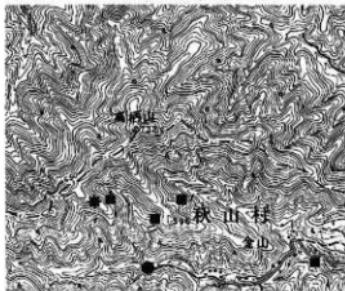
担当者 村石真澄・田中宗博

本遺跡は、高柄山（733m）と金山峠に狭まれた金山川の沢沿いに立地する。金山神社を中心として、標高約450m付近に位置する。

調査は金山神社境内周辺の発掘調査と周辺の金採掘坑等への踏査や金山集落内への聞き取りを含めた調査を実施した。金山神社境内では、近年倒壊した社務所の下から建物の基礎である石列（規模：南北に2.7m、東西に4.2m）が確認された。また、この石列の下には焼けた小豆大から人頭大の石と、同じく焼けた土が大量にあり、その下を掘り下げたところ炭化物が約5cmの厚さで、少なくとも4m以上に広がる平坦面が確認された。しかし、地表下80cmと深く現状の神社の石積みと接続しているため、今回は調査できなかった。神社から50mほど下流の星野家の旧屋敷跡についても3本の試掘溝を設定して調査したが、戦後まもない頃まで水田として耕作されていたためか金採掘に関わる遺物・遺構とも確認することはできなかった。一方、旧屋敷跡の石垣からは金鉱石をすりつぶすときに使用した「金スリ臼」が2点発見された。

金山集落内への聞き取り調査時にも、金スリ臼の存在を確認した。これは古くは戦国時代にまで遡る可能性をもつものである。さらに、地元の見聞・伝承に基づいて採掘坑跡への踏査を行った。この踏査で17ヶ所の採掘坑跡を確認した。中でも注目すべき点は露天掘りで金を探掘したと考えられる跡を確認できたことである。この露天掘り跡は、金山神社から高柄山に向かって30分ほど登った尾根上で「つつみの平ら」と呼ばれている場所にあたる。テラス状の平坦面が広がり、多くのすり鉢状の窪みがあるなど地形を人為的に改変していることが認められた。金山史の研究者によると、こうした露天掘りは全国的にみても戦国時代に属するものが圧倒的に多く、この金山金山遺跡も古く戦国時代に操業が開始されたものと判断されるという。

金山金山遺跡は将来的には砂防堰堤の建設により消滅あるいは埋没してしまうため、金山神社の石積みなどについては移築復元が計画されている。そのため、神社移転時とその後の継続調査を計画している。また、今後の露天掘り跡等への詳細な調査も望まれる。



金山金山遺跡 位置図
金山神社（●） 金採掘坑跡（■）
露天掘り跡（星）



金山神社境内発掘状況



露天掘り跡
(直径3～5mの窪地がみられる)



金スリ臼（星野五俊氏所蔵）

23. 八ヶ岳東南麓遺跡群ほか遺跡分布調査

23-1. 長坂警察署大泉駐在所増築に伴う試掘調査

所在地 北巨摩郡大泉村谷戸3359

遺跡名 城上第3遺跡

調査期間 1998年11月25日

調査面積 14m² (24m²)

担当者 三田村美彦

調査区となる駐在所増築箇所に沿って長さ4~6m、幅1mのトレンチを設定し、人力にて遺構・遺物の有無の確認作業を行った。調査範囲内は以前に建てられていた建築物による搅乱が著しく、調査区北側ではローム層まで達していた。調査区南側でも、縄文時代遺物包含層と思われる暗褐色土が僅かに残存する程度で、遺構・遺物は全く確認されなかった。よって、調査区内に埋蔵文化財は存在しないと判断し、調査を終了した。

23-2. 釜無川流域下水道建設に伴う試掘調査

所在地 荘崎市富士見3丁目2572-1

調査期間 1998年11月25日

調査面積 81m²(868m²)

担当者 田口明子

釜無川流域下水道建設事業に伴う調査を行った。調査地点の東へ約500mの所に塩川が、また、西へ500m程の所には、釜無川が流れている。標高は約350mを測る。調査前は水田であった。

南北に長い、幅約2m、長さ17.5~23mの2本のトレンチを設定し、重機により掘り下げた。現地表面から約3mまで掘り下げたが、地山と成り得る層は発見できなかった。また、遺物の出土も認められなかった。

23-3. 県道17号線改良工事に伴う試掘調査

所在地 荘崎市水神1丁目地内

遺跡名 西表堤防遺跡

調査期間 1998年12月18日~22日

調査面積 150m²

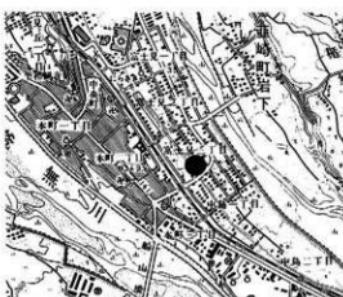
担当者 小林健二・依田幸浩

調査は、ほぼ堤防に沿って幅6m、長さ25mにわたって設定された工事箇所をトレンチとして行った。

調査の結果、堤防の川表側法面の石積みと、裏込め石の構築状況が確認できた。工法としては、基盤となる砂礫層に大きめ



試掘調査 位置図



試掘調査 位置図



試掘調査 位置図

の石を敷き砂質上で盛り土をし、その上に石積みがされたものと思われる。石の間からは陶磁器片が出土した。

この堤防は、現在並崎市民俗資料館に保管展示されている写真と、『並崎町制六十年誌』（並崎町役場1953年）に掲載された絵図から、明治35年に構築された「西表堤防」である。今回の調査は、川表側基底部は確認できなかったが、枠類の存在が予想される。

23-4. 富士川宅地等水防対策に伴う試掘調査

所在地 南巨摩郡鰐沢町鰐沢1389-1外

遺跡名 鰐沢河岸遺跡

調査期間 1998年12月14日～16日

調査面積 53m² (700m²)

担当者 山本茂樹・大木丈夫・網倉邦生

1996年に鰐沢河岸跡が発掘調査され、今回の試掘場所は河岸跡と隣接する地区である。

本調査区は、富士川の水運として発展した鰐沢河岸遺跡内に位置する。このことから調査区内に4本の試掘溝を設定し、掘り下げを行った。その結果、現表土から170cm前後において、部分的に砂質層の互層が認められる場所もある。また、瓦や陶磁器片等が大量に出土する地区があり、廃材等も確認される。特にこの遺物出土層からは、明治時代の古鏡および大正時代の古錢が見つかり、当時の建物や遺物の時期が明らかにされた。

また他の箇所においては、深さ約140cmのところで白色の層が15～20cm堆積しており、御蔵で使われていた漆喰の可能性がある。この御蔵については、調査区の富士川寄りに御藏台の存在が知られており、大正年間まで河岸が存在していたことが明らかにされている。

23-5. 甲府駅北口駐車場建て替えに伴う試掘調査

所在地 甲府市北口2丁目

遺跡名 北口2丁目遺跡

調査期間 1998年7月27日～30日

調査面積 120m²與

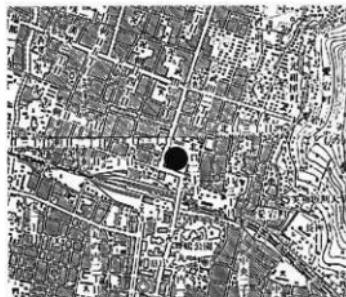
担当者 八巻與志夫・宮里学

試掘調査範囲は、基礎工事箇所を中心に南北方向の試掘坑を2本設定し、アスファルト舗装をカッターで除去したのち、重機による掘削を開始した。

該当地は、江戸時代中頃の絵図で武家地の範囲に取り込まれていたことから、武家屋敷に関連する遺構・遺物が確認されると推測されたが、近代の搅乱（廃材廃棄等）により確認できなかった。しかし、安定した土中からは古墳時代の土器片や中世のかわらけ・石製品が出土している。遺構については、溝が2本（南北方向）と土坑数基が確認されている。



試掘調査 位置図



試掘調査 位置図

23-6. リニア実験線変電所建設に伴う試掘調査

所在地 東八代郡八代町米倉字上ノ平2085-37外
遺跡名 竜安寺川西遺跡
調査期間 1998年12月3日～11日
調査面積 12,200m²（砂防区域を除く6,600m²）
担当者 熊谷栄二・市川恵子

リニア実験線に伴う変電所建設予定地の遺跡確認調査である。調査区に幅1.0m×長さ3～30mのトレンチを42本設定し、まず重機により掘削した後、人力にて遺構・遺物の有無の確認調査を行った。総トレンチ面積は700m²であるただし、調査対象地のうち竜安寺川から40m以内の砂防区域については調査を行っていない。基本土層は5～30cmほどの耕作土の下に10～30cmほどの黒褐色土があり、褐色ローム層が基礎となる。調査地は急傾斜であり、桃畠造成のために上層のうちのかなりをすでに掘削されている上、現地表面においても擾乱箇所が多い。調査の結果、遺構は全く確認されず、出土した土器もごく少量でそのいずれについても磨滅が著しく流れ込みのものであると考えられる。



試掘調査 位置図

23-7. 国道137号改築（上黒駒バイパス）に伴う試掘調査

所在地 東八代郡御坂町上黒駒字上の原下割4489外
遺跡名 上の原下割遺跡
調査期間 1997年12月1日～11日
調査面積 1,242m²（12,000m²）
担当者 野代幸和

上の原下割地内において、重機による表土削除と人力による精査によって遺跡の確認調査を実施した。その結果、設置した34本のトレンチの内、13本のトレンチ内から主に土器類の遺物が発見でき、また4本のトレンチからは、遺構が確認できた。No14からは中世以降と考えられる溝の跡が1条、No17トレンチからは縄文時代の形態が窺える陥し穴が1基、No18トレンチではバーベキューを行ったと考えられる炭化材を含む集石土坑が1基発見できた。No22トレンチからは縄文時代中期の住居跡が1軒発見でき、遺物では縄文時代中期中葉から後葉の土器、弥生時代後期の赤彩土器、中世の陶器、近世と考えられる踏鉄などが出土した。23・25・26・28・29トレンチからは縄文時代中期初頭（五領ヶ台式）、後期前葉（堀之内式）などの土器も出土している。

主に遺構の存在がはっきりし、遺物がまとまって出土した上の原下割4489を中心とした約3,000m²の地区については、地形的に水場が予想できる沢に挟まれ、定住に適した平坦部が南北に約60mの広がりを持っている。よってこの地点については、工事を行う前に本調査の必要がある。



試掘調査 位置図

23-8. 県職員石和独身寮改築に伴う試掘調査

所在地 東八代郡石和町窪中島312-2

調査期間 1999年2月18日

調査面積 18m²

担当者 長沢宏昌

当初は、県職員石和独身寮敷地内の駐車場に2本のトレンチを設定し、敷地内東西の断面観察を行う予定でいたが、後述するようにトレンチが非常に深く排水の置き場所が確保できないこと、および上層の堆積が安定しており、複数箇所の観察は不要と判断したことにより、建物に近いトレンチをやや広く掘削し観察することにした。トレンチは重機のアームが届く範囲ギリギリまで掘削することとし、結果として現地表から約3.3m掘り下げた。断面を観察したところ、厚く砂が堆積していたが分かった。この砂層は明治40年の水害によるものと推定されるが、遺物は全く含まない。また、地表下2.9mには35cmの厚さで泥炭層が確認され、アシなどの植物（茎・葉・根など）が未炭化で検出されたものの、人工遺物は皆無であった。断面観察後、写真撮影と埋め戻しを行い終了した。

近接の石和警察署建設予定地の試掘調査（昨年度）の結果でも、土層の堆積状況はほぼ同じであり、遺構は全く認められていない。これらの状況から、少なくとも今回の対象域は遺跡とは認められない。

23-9. 国道411号改築（塩山東バイパス）に伴う試掘調査

所在地 塩山市下於曾影井226ほか

遺跡名 影井遺跡

調査期間 1999年2月22日～24日

調査面積 500m² (3,600m²)

担当者 小林孝子・米山真

国道411号改築（塩山東バイパス）に伴う遺跡の所在確認調査である。今回試掘調査を行った地点は、重川沿いのなだらかな小山状の台地が連続する地形の中で、谷部から台地先端部である。調査は長さ約10m、幅2mの調査溝を東西に合計18本設定し掘り下げた。谷部では細かく何層もの砂礫層が堆積し、遺物・遺構等は確認できなかった。また台地先端部において掘立柱建物跡が確認でき、中世の遺物が出土した。この地点は影井遺跡として周知され、台地南側には縄文時代前期末～中期の集落跡である大木戸遺跡が所在することもあり、台地上に遺跡が広く展開している可能性がある。



試掘調査 位置図



試掘調査 位置図

23-10. 西関東連絡道建設に伴う試掘調査

所在地 東山梨郡春日居町鎮目1173外

調査期間 1998年11月19日～20日

調査面積 1,000m² (20,000m²)

担当者 吉岡弘樹・深沢容子

西関東連絡道建設予定地内の遺跡確認調査である。

調査地は、大蔵経寺山から日影沢を隔てて存在する兜山山麓の裾部分（標高約300～285m）にある。古墳の存在が確認できそうな急峻な傾斜地については踏査を、その他の部分については未買収地等に影響を与えないようにトレーンチを10箇所ほど設定し、バックホーと人力で掘り下げながら遺構・遺物の有無を確認することとした。その結果、すべての地点で遺構・遺物など一切、検出されなかった。



試掘調査 位置図

23-11. 西関東道路建設に伴う試掘調査

所在地 東山梨郡春日居町下岩下281-1外

遺跡名 横町遺跡

調査期間 1999年3月15日～24日

調査面積 382m² (8,000m²)

担当者 山本茂樹・大木丈夫

西関東道路建設予定地の遺跡範囲確認のための試掘調査である。長さ8m～20m、幅2mのトレーンチを22本設定した。畑灌が埋設されている所と、立木がある場所については試掘溝を設定できなかった。遺構としては、規模3m前後の住居跡と思われるものが確認された。そこからは平安時代末期から中世の遺物が出土している。他には、深さ30cmの所の黒色土で平安時代の壺・甕も出土している。遺構が確認された地点から西側に遺跡は広がっていると推定される。



試掘調査 位置図

23-12. 中部横断道建設に伴う試掘調査

所在地 中巨摩郡白根町、北巨摩郡双葉町、

中巨摩郡柳形町

遺跡名 百々遺跡、横堀遺跡

事業名 八ヶ岳東南麓ほか遺跡分布調査

調査期間 平成10年5月7日～平成11年3月3日

調査面積 16,970m²（対象面積257,000m²）

担当者 保坂康夫・小林広和

白根地区

中巨摩郡白根町百々（どうどう）から在家塚（ざいけつか）までの2.8kmの区間、調査対象面積181,000m²について調査した。調査面積が12,220m²である。平成10年5月7日から6月12日にかけて調査した百々地区では、長さ10～50m、幅2m、深さ1～2mの試掘坑を49本掘下げ、900mにわたり遺構・遺物を確認した。遺構は平安時代の竪穴住居跡20軒のほか、溝やピットを多数。遺物は弥生時代前半期と思われる石器、古墳時代後期の土器が若干みられたが、主体は平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器であった。平安時代を中心とする巨大な集落の存在が推定される（百々遺跡）。平成10年7月9日から10月9日にかけて調査した白根インターチェンジのある在家塚地区では長さ20～45m、幅6m、深さ3.5～6mの試掘構を37本設定した。その結果、白根インターチェンジ南東部で、弥生時代前期から中期にかけての土器・石器が多数出土し、1,000m²ほどの遺跡の広がりを確認した（横堀遺跡）。

双葉地区

北巨摩郡双葉町竜地字着物沢地内の双葉ジャンクションから下今井字上ノ山地内までの1.2kmの区間。調査対象面積64,000m²。長さ10～60m、幅2m、深さ0.5～2mの調査溝を86本設定。調査面積は4,610m²。着物沢地区は平成10年6月15日から7月1日、上ノ山地区は平成10年7月2日から7月8日、市子石地区は平成11年2月22日から3月1日に調査。遺構、遺物はまったく確認できなかった。

若草インターチェンジ料金所地区

中巨摩郡柳形町十五所地内の12,000m²を対象。長さ10m、幅2m、深さ1～2mの調査溝を7本設定。調査面積は140m²。平成11年3月3日に調査。遺物が数点確認されたが、遺構は確認できなかった。



双葉地区



白根地区(上)と若草インターチェンジ地区(下)

III. 県内の概況

1. 発掘調査

1998年度に実施された県内の発掘調査件数は、試掘調査を含めて235件となっている。県が38件、市町村が197件である。調査を原因別に見ると、道路関係64件、住宅48件、その他の建物39件、その他開発25件、宅地造成17件、農業13件、区画整理3件、学校2件、河川1件、公園1件、その他15件などの緊急調査が227件、学術調査8件となっている。

2. 発掘調査の成果

旧石器時代では、八ヶ岳南麓の長坂町米山（横針前久保）遺跡から約3万年前の局部磨製石斧・ナイフ型石器が出土。縄文時代では、県東部山間地で桂川流域の河岸段丘上の大月市塩瀬下原遺跡、また上野原町南大浜遺跡から敷石住居跡の発見がある。塩瀬下原遺跡の敷石住居跡は、居住部が7×7mに3mの柄がつくというもので、極めて大型の柄鏡型敷石住居跡として注目された。古墳時代では、上九一色村の本柄湖の湖底遺跡（水深10m前後）の潜水による調査が話題になった。春日居町の平林2号墳（6c中頃）は、横穴式石室の古墳であり調査後移築保存されることになった。八田村の石橋北屋敷遺跡は、從来遺跡確認が粗とされた御駒使川扇状地に奈良から戦国時代の集落遺跡。茅ヶ岳山麓の明野村深山田遺跡では、中世の集石墓・火葬墓が検出され、また仏具の銅鏡14口が出土。近世の甲府城跡では、煙硝倉跡・井戸跡などを確認。近世の民間信仰遺跡として、南部町原岡遺跡から数万点の一石経（裸石經）が出土。

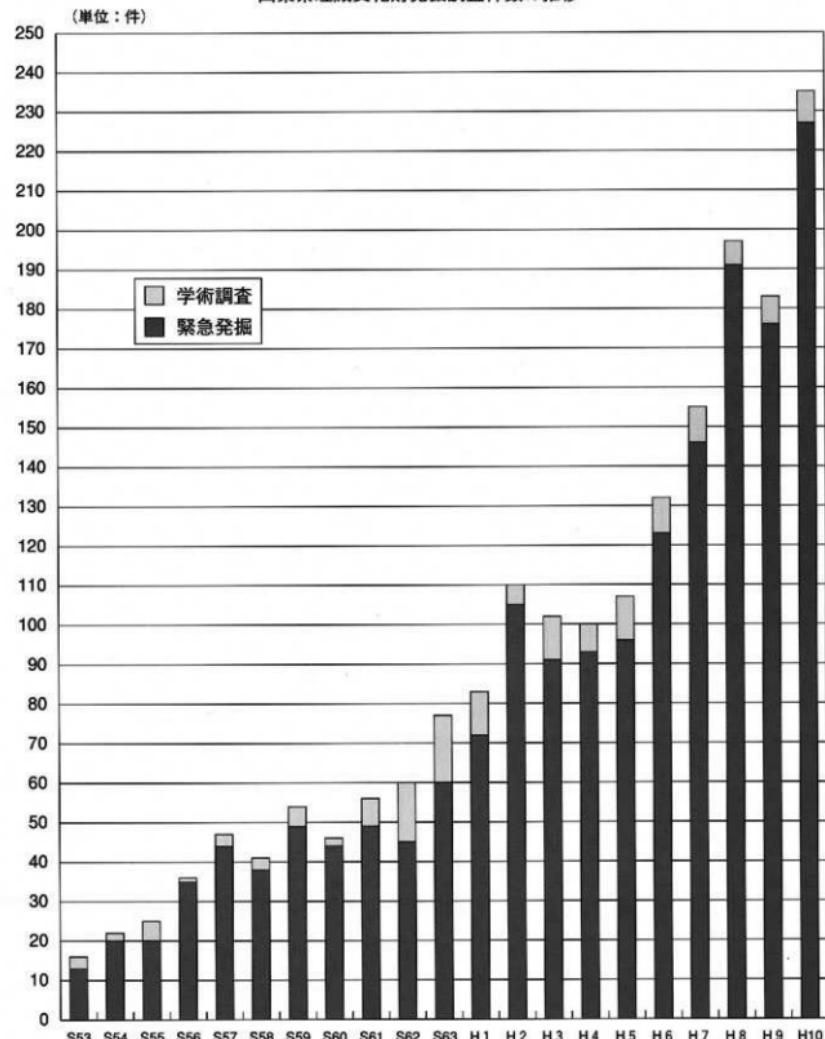
3. 遺跡の保存整備

国指定史跡関係は、勝沼氏館跡・武田氏館跡・谷戸城跡・新府城跡が整備のための調査を実施している。県指定史跡の甲府城跡では、本丸・煙硝倉などの調査を行い、並行して稻荷曲門・内松陰門・築地壁の復元を行っている。丹波山村の縄文時代集落の成畠遺跡、三珠町大塚の大塚古墳、櫛形町の狐塚古墳なども保存整備の事前調査を実施している。

4. 調査体制

埋蔵文化財専門職員（埋蔵文化財担当および担当可能職員）については、県が学術文化財課3名（他に博物館関係1名）、埋蔵文化センター34名（他に非常勤嘱託2名）、考古博物館2名（他に博物館関係1名）、市町村では、伊豆市6名、御坂町2名（他に教育委員会外に1名）、韮崎市2名（他に非常勤嘱託1名）、長坂町2名、都留市・塩山市・山梨市・春日居町（郷土館兼務）・勝沼町・牧丘町・石和町・中道町・境川村・豊富村・八代町・一宮町（他に釧路堂博物館に1名）・三珠町・増穂町・梅形町・伊西町・白根町・敷島町・竜王町・双葉町・大泉村・須玉町（他に非常勤嘱託1名）・明野村・高野町・武川村・白州町・小酒沢町・上野原町に各1名、また大月市の博物館に2名、富士吉田市の歴史民俗資料館等に2名が、若草町と昭和町の共同設置で1名の合計48名（非常勤嘱託3名含む）となっており、64市町村のうち36市町村に配置されている。

山梨県埋蔵文化財発掘調査件数の推移

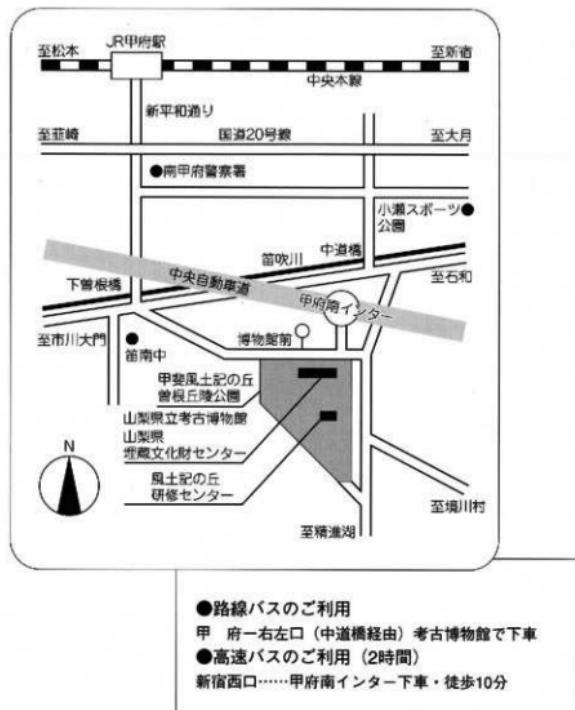


	S53	S54	S55	S56	S57	S58	S59	S60	S61	S62	S63	H1	H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8	H9	H10
学術調査	3	2	5	1	3	3	5	2	7	15	17	11	5	11	7	11	9	9	6	7	8
緊急調査	13	20	20	35	44	38	49	44	49	45	60	72	105	91	93	96	123	146	191	176	227
合計	16	22	25	36	47	41	54	46	56	60	77	83	110	102	100	107	132	155	197	183	235

1998年度 発掘調査一覧表

（第三回）

			その他の(付記)	平均小計販賣額(円)	
177	平山連理	中野市北口2丁目111	243,45	地卸販	1998/1/15
178	中野連理	中野市北口2丁目102-26	609,90	地卸販	1998/1/9
179	万川連理	東八幡町西1丁目5番地	500,00	地卸販	1998/1/8
180	今井連理	東八幡町西1丁目5番地	500,00	地卸販	1998/1/14
181	大川連理	西八幡町西1丁目5番地	500,00	地卸販	1998/2/28
182	糸井連理	西八幡町西1丁目5番地	500,00	地卸販	1998/2/28
183	武井連理	西八幡町西1丁目5番地	500,00	地卸販	1998/5/14
184	北野連理	北野町東山1丁目5番地	200,00	地卸販	1998/2/12
185	鶴見連理	中野市北口2丁目102-26	162,54	地卸販	1998/2/17
186	中野連理	中野市北口2丁目102-26	400,00	地卸販	1998/2/23
187	前田連理	西八幡町西1丁目5番地	280,00	地卸販	1998/2/21
188	越後山連理	西八幡町西1丁目5番地	280,00	地卸販	1998/2/21
189	丸山連理	西八幡町西1丁目5番地	500,00	地卸販	1998/2/21
190	横田連理	中野市北口2丁目102-26	160,00	地卸販	1998/2/21
191	高橋連理	中野市北口2丁目102-26	500,00	地卸販	1998/2/21
192	高木連理	中野市北口2丁目102-26	160,00	地卸販	1998/2/21
193	高木連理	中野市北口2丁目102-26	160,00	地卸販	1998/2/21
194	高木連理	中野市北口2丁目102-26	160,00	地卸販	1998/2/21
195	高木連理	中野市北口2丁目102-26	160,00	地卸販	1998/2/21
196	高木連理	中野市北口2丁目102-26	160,00	地卸販	1998/2/21
197	伏見連理	中野市北口2丁目102-26	160,00	地卸販	1998/2/21
198	寺内連理	中野市北口2丁目102-26	160,00	地卸販	1998/2/21
199	寺内連理	中野市北口2丁目102-26	160,00	地卸販	1998/2/21
200	柳原・永井連理	中野市北口2丁目102-26	160,00	地卸販	1998/2/21
201	柳原連理	中野市北口2丁目102-26	160,00	地卸販	1998/2/21
202	柳原連理	中野市北口2丁目102-26	160,00	地卸販	1998/2/21
203	二尾連理	中野市北口2丁目102-26	160,00	地卸販	1998/2/21
204	大川連理	中野市北口2丁目102-26	160,00	地卸販	1998/2/21
205	河原連理	中野市北口2丁目102-26	160,00	地卸販	1998/2/21
206	鈴木連理	中野市北口2丁目102-26	160,00	地卸販	1998/2/21
207	鈴木・川上連理	中野市北口2丁目102-26	160,00	地卸販	1998/2/21
208	中野連理	中野市北口2丁目102-26	160,00	地卸販	1998/2/21
209	小林連理	中野市北口2丁目102-26	160,00	地卸販	1998/2/21
210	高橋連理	中野市北口2丁目102-26	160,00	地卸販	1998/2/21
211	高橋連理	中野市北口2丁目102-26	160,00	地卸販	1998/2/21
212	高橋連理	中野市北口2丁目102-26	160,00	地卸販	1998/2/21
213	高橋連理	中野市北口2丁目102-26	160,00	地卸販	1998/2/21
214	高橋連理	中野市北口2丁目102-26	160,00	地卸販	1998/2/21
215	高橋連理	中野市北口2丁目102-26	160,00	地卸販	1998/2/21
216	川上連理	中野市北口2丁目102-26	160,00	地卸販	1998/2/21
217	弓削連理	中野市北口2丁目102-26	160,00	地卸販	1998/2/21
218	弓削連理	中野市北口2丁目102-26	160,00	地卸販	1998/2/21
219	弓削連理	中野市北口2丁目102-26	160,00	地卸販	1998/2/21
220	中野連理通運	中野市北口2丁目1-1	1161,47	地卸販	1998/2/21
221	神内連理	中野市北口2丁目1-1	273,24	地卸販	1998/2/21
222	北野連理	北野町東山1丁目5番地	100,00	地卸販	1998/2/21
223	川井連理	中野市北口2丁目1-1	219,94	地卸販	1998/2/21
224	川井連理	中野市北口2丁目1-1	40,00	地卸販	1998/2/21
225	佐野連理	中野市北口2丁目1-1	134,00	地卸販	1998/2/21
226	佐野連理	中野市北口2丁目1-1	41,00	地卸販	1998/2/21
227	佐野連理	中野市北口2丁目1-1	1161,47	地卸販	1998/2/21
228	中野連理通運	中野市北口2丁目1-1	30,00	地卸販	1998/2/21
229	中野連理	中野市北口2丁目1-1	60,00	地卸販	1998/2/21
230	中野連理	中野市北口2丁目1-1	120,00	地卸販	1998/2/21
231	中野連理	中野市北口2丁目1-1	63,00	地卸販	1998/2/21
232	中野連理	中野市北口2丁目1-1	80,00	地卸販	1998/2/21
233	中野連理	中野市北口2丁目1-1	80,00	地卸販	1998/2/21
234	秋山連理	中野市北口2丁目1-1	120,00	地卸販	1998/2/21
235	秋山連理	中野市北口2丁目1-1	120,00	地卸販	1998/2/21



年報 15

印刷日 平成11年3月25日

発行日 平成11年3月31日

発行所 山梨県埋蔵文化財センター
山梨県東八代郡中道町下曾根923
TEL 055-266-3881・055-266-3016
FAX 055-266-3882
印刷所 株式会社 峡南堂印刷所
TEL 055-235-2528

